古明地さとりのΨ難

きのこ狩り

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古明地さとりが斉木楠雄のΨ難の世界に放り込まれた話

斉木楠雄と古明地さとりが妙に似てない？って思い付きで書き始めました。ナメクジ投稿ですが、楽しんで頂けると嬉しいです

詳しいあらすじや注意事項のようなものは、第０Ｘに書かれています

追記

偶に自分で読み返したりしますので、何度か投稿後に編集をやってしまいます。ごめんなさい

至らぬ点があるのであれば、指摘をお願いします

目次

第０Ｘ　注意のΨ難 ―――― 1
覚妖怪転校編
第１Ｘ　逃亡のΨは誰よりも早く 8
第２Ｘ　Ψ終回にはまた？遠い 14
第３Ｘ　Ψ悪な朝か？来た!! ― 20
第４Ｘ　少女登校中 ―――― 29
第５Ｘ　Ψ凶転校生がやって来た 35
第６Ｘ　Ψ難種族覚 ―――― 42
第７Ｘ　主人公のΨ疑（前編） 48
第８Ｘ　主人公のΨ疑（後編） 56
Ψ人と妖怪の出会い編
第９Ｘ　上位、Ψ強テレパシー 68
第１０Ｘ　二人目　レディΨキック？ ―――― 82
第１１Ｘ　二次でも集う！ＰＫ学園Ψキッカーｗｉｔｈ？ ―――― 91
第１２Ｘ　想起せよ　恐怖Ψ眠術 101

古明地一家　日常のΨ難編

第13X　相性Ψ○!?　完璧美少女と覚少女 ―――― 113
第14X　ちいΨ王様　一目惚れ物語 ―――― 128
第15X　異Ψ猫、火焔猫燐 ―――― 134
第16X　大Ψ害!!フューシ?ョンを止めろ! ―――― 145
第17X　厄Ψアニマルス?、Ψ初の出会い ―――― 154
第18X　Ψ悪の鳥　霊鳥路空 ―――― 167

第0X　注意のΨ難

僕の名前は斉木楠雄。超能力者である。

これは冗談なんかではない。寧ろ冗談であってほしいものだ。

これほど言っても信じない人の為に、僕が使える超能力の例を挙げよう…と思ったがこれを読んでいるという事は既にご存知の原作『斉木楠雄のΨ難』を読んでくれた読者がほとんどであろう。その為説明を省かせてもらう。ご存知でない読者は、これを読んでくれる前に原作を読んでくれる事をオススメしたい。

なので今回は携帯画面の前のみんなに、注意事項を伝えようと思う。

この小説は僕、斉木楠雄に襲いかかる災難を超能力を駆使して乗り越える『斉木楠雄のΨ難』のクロスオーバー二次創作物である。

まぁ言い換えるなら、絵を描けない上に文才の無い素人の作者が、思い付きだけで書き起こしただけ…そう、所謂『駄文の塊』だ。勿論全ての二次創作物がそうとは言わないが、少なくともこの作品の作者は、駄文しか書けない。

因みに二次創作を書く為の時系列についてだが、原作やアニメで見たみんなならもう知っているであろう『未曾有の大噴火』。

僕はこの噴火を止める為に僕の超能力の一つ『復元能力』で地球全体を一年前に戻し、一年を繰り返している。そして原作の最終回、僕の正体を知る一部の奴らと協力して、噴火を阻止、そして兄である空助の発明により僕は超能力を捨て、新たな学年を迎えた所で物語は終わる。

これが原作の世界線だ。

しかし、この作品は恐ろしい事に、最終回の噴火を止める事が出来なかった世界線、つまりまた一年前に戻す事になった世界線なのだ。その為原作のキャラ達は既に出ている前提の話である。

全く、作者め…とんだ世界線を用意してくれたな…

なので原作を知っている、主にΨ始動編を読んだみんなには解釈違いが起こったり、場合に寄っては不快に思う事もあるだろうが、文才の無い作者に免じて付き合ってもらえるとありがたい。

さて、作品と作者に関する注意事項を言った所で、次の注意事項を言おう。

ん？僕は別に注意事項は一つだけとは言っていないぞ。文句があるなら作者に言うといい。

二つ目の注意事項は、クロスオーバー…コラボ先の作品についてである。

クロスオーバー…説明している時間はないので、各々調べてほしい。ところで、この

言葉に対して、画面を見ているみんなはどんなふうに思うだろうか。
多くの読者は、自分が大好きな作品と大好きな作品の夢のコラボ…そう思う人が多いだろう
その夢のコラボを果たす作品を紹介しようと思う。
それは、二次創作の代名詞と言っても過言ではないらしい、神の主と呼ばれた『Ｚ○Ｎ氏』が制作したあの大人気シューティングゲーム
『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』
そうこの作品は、
『斉木楠雄のΨ難』とあの『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』とのクロスオーバー作品なのだ。
因みに本当に代名詞なのかどうかは、作者がそう思い込んでいる可能性もあるため気にしないでいただきたい。
因みに、僕自身は『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』の事を全く知らない。吸血鬼姉妹や紅白巫女、白黒魔法使いすらだ。
それどころか、僕達の世界には『東方Ｐｒｏｊｅｃｔというコンテンツは存在しない』という体である。
なので、『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』のキャラが登場したとしても、少なくとも「あ、東方のキャラだ」と反応する事は絶対にない為、理解してもらいたい。僕以外の奴らも同様

だ。

他にも、『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』とクロスオーバーされた多くの二次小説は、その作品の主人公やキャラクターが、『幻想入り』する話が多いようだが、それを期待しているみんなに忠告しておく。

残念ながらしないでくれ。これはそういう話ではない。

これは『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』のキャラの一人が、僕が通うＰＫ学園に転校してくる物語なのだ。

大体、僕の日常は災難に見舞われているのだ。だと言うのに、そんな「ヒャッハー」な事態に見舞われてみろ。超能力を持った僕が妖怪程度に負ける事は無いにせよ、精神的に参って下手すれば過労死してしまう。それに作者自身も、二つの世界と同時進行など不可能だろう。文才無いし。

なので、幻想入りは行わない為期待しないでもらいたい…しないよな？しないでくれよ？頼むぞ作者。

どうせなら幻想入りはあのクズ（鳥束）にしてくれ。女性だらけの最後の楽園で最期を迎えるのは本望だろうからな。

だがもし僕を幻想入りなんかさせたら

『お前ごとこの小説を消す』

さて、作者への警告も済ませたところで次の注意事項を…長い？もう少し待て、あと一つだけだ。

最後の注意事項は、『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』からの登場キャラについてだ。『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』のキャラと言えば、さっきも言ったが、吸血鬼姉妹や魔法使いや巫女を思い浮かべるだろう。

そこで残念なお知らせだ。

こいつらは基本出てこない。出てきたとしても話に上がるか、ほんの一瞬だけだ。

他はキャラによっては出てくるかも知れないがそこも注意して欲しい。

となると誰が登場するのか…

しかし、多くの読者はこの作品のタイトルで想像が付くだろう。

【古明地さとりのΨ難】

そうこの作品は、『覚妖怪』古明地さとりが中心となる。

締めに、あらすじでも説明するとしよう。

幻想郷の地底に建つ地霊殿の主にして、地球に放り出された古明地さとりは、幻想郷の賢者に数年間ＰＫ学園で学校生活する事を命じられる。
２年$\mathbb{3}$組に転校してきたさとりは学校生活初日にして、自分と同じ力を持つある少年と出会う。
彼の名は斉木楠雄。超能力者である。
彼と出会った事によりさとりは数々の災難に巻き込まれてしまう。

さて、注意事項やあらすじを紹介し終えた所で、そろそろ本編を開始するとしよう。
それにしても僕と同じように生物の心を読めるさとりの妖怪か、これはまたとんだ災難に巻き込まれそうだ。やれやれ。
「くーちゃーんコーヒーゼリー用意してあるわよー」
それじゃあ画面の前のみんな、第２Ｘで会うとしよう。
僕にはコーヒーゼリーが待っているのでね。
【古明地さとりのΨ難】
始動！

「あの…勝手に呼び出されて主人公に抜擢されて災難に遭うとまで言われているのに私に対する説明やお詫びが無いのはどういう事ですか?」

…始動!

「いや、始まる前に私にも詳しく説明

…始動!!

「おいこら、ゴリ押せばいいってものじゃ

始動!!

「嫌よ災難なんて、主人公なんて絶対に嫌d

始動!!!!

覚妖怪転校編

第１Ｘ　逃亡のΨは誰よりも早く

地霊殿

旧都の中心部に位置する西洋風の建物。灼熱地獄跡の上に建っている。主は古明地さとり。

中庭には怨霊が溢れかえる灼熱地獄跡へ続く穴があり、地霊殿はこの穴を塞ぐ役割をしている。

主であるさとりを慕って集まったペットが溢れかえっており、怨霊や灼熱地獄跡の管理などをさとりから任されている。

東方大百科より

いわゆるコピペである

私の名前は古明地さとり。この地霊殿の主です。その名の通り覚り妖怪です。

何故かいろんな妖怪に「小五ロリ」だとか「サドリ」だとか言われてますけど覚り妖怪です。

心を読む事ができる為人間は勿論他の妖怪達も私に近づこうとはしません。でも別

に寂しくはありませんよ。可愛いペット達はいますし、可愛い妹もいます。偶に危なっかしいけど

私はいつものように旧地獄の管理や旧都に関する書類の整理、偶に本を読んだり執筆中の小説を書いたり…いつものように平和に暮らしています。

私は偶に思うのです。

(こんな日がずっと続いたらいいなぁ…)

と

私は言った事を逆転させる月の偉い人のような能力を持っている訳ではありませんが…

大体こういう時は平和が打ち滅ぼされるのです…

「ヤッホーさとりーん。可愛いゆかりんが遊びに…」

出ました。平和の破壊者が

彼女は八雲紫

ここ幻想郷の賢者にして、隙間というのを使ってど○でもドアのようにどこからでもやってくる厄介な能力を持ち、胡散臭い態度で周りをかき乱す自称17歳である

「いやちょっと何言ってんのよ! 紹介酷くない!? 私は自称じゃなくて永遠の17歳よ!」

貴女こそ何言ってるんですか
「そんな紹介だと私が年齢を偽っている痛い女認定されちゃうじゃない！」
（もうされていますよ主に二次創作の世界だと既に）
とツッコミそうになったけどやめておきましょう。これ以上この件に口を突っ込んだら幻想郷名物弾幕勝負にまで発展してしまう
「おほん…それじゃあ用件を言うわねさとりん」
まずさとりんって言うのやめてもらっていいですか？それと温泉とマントルならあちらです
「いいえ今回は温泉じゃないの。勿論マントルの探検でもないわ」
因みに、何故「」を付けないで会話が成立しているかと言うと
私の《心を読む程度の能力》を応用しているからです。自分の心の声を、催眠術の原理で直接脳内に語りかける。お陰であまり口を聞きたくない相手にも会話を成立させる事が出来ます。
「みんなへの説明はいいけど「口を聞きたくない相手」の中に私も含まれてないわよね？」
さーてどうなんでしょうか？今私は喋るのがめんどくさいだけなので。あまり気にしないでください

「（遠回しに私と喋るのがめんどくさいって言ってるわね）ゆかりん軽くショックだわ…」

で、何しに来たんですか？

「もう喋る気がなくなっちゃったわ…心を読んでくれない？」

全く、これだからめんどくさいって言われるのですよ。やれやれ

私の能力は相手の表層意識…心ではなんと思っているのかがわかります。もっと頑張れば深層意識も読むことはできるけど面倒なのでそれは別の機会にしましょう。

さて、幻想郷の賢者の表層意識は…ふん、やっぱりか。

私に読ませる情報だけ出して他は深層意識に隠す。巨大な力を持つ大物が行うさとり妖怪対策。

自慢ではないですが、私は自分のこの能力は危険なものと自覚しています。

知らなくていい事、知りたくなかった事まで知ってしまう事があって…

そのため、この能力を知る大物は何かしら対策しないと大変なことになってしまうので、私も理解している為こういう大物の深層意識を調べようとは思わないのです

まぁ調べようとする前に消される恐れもあるけど

さて、頼み事は…

（最近一年間が繰り返されているのよねぇ。幻想郷だけじゃなくて外の世界も同じよう

に。一部の里の人間達は何かの異変だとおもっているみたいだけど手掛かりはないし、霊夢も調査しているのに尻尾も掴めなくて。だから外の世界の状況を調べて分かったのだけど、何者かが地球ごと一年前に戻してるみたいで、周りのみんなはなんでか私を疑っちゃうからゆかりんの繊細な心はもうボロボロに（長い!!

もっと簡略的に伝えてください

（ええっと、いまからさとりんには外の世界に行ってもらって、この一年巻き戻し異変を解決してほしいのよ～）

成る程、確かに数回同じ年が続いているとは感じていましたし（引きこもってたし全く気にして無かったけど）その解決に私の力が…は？

（ニヤリ）

聞き間違いね。うん、そう、聞き間違い。正しくは読み間違い。だっておかしいじゃない。私は地霊殿の主よ？ここにいないといけないし、第一普段から引きこもっている私が外に…しかも幻想郷の外に行けとか…私に死ねと？

（大丈夫よ。最終的にはここに戻ってもらうし、仕事も代役に頼むわぁ。それに暮らす時のバックアップもゆかりんにお任せ《キャピーン）

何が『キャピーン』だこら！痛々しいんだよ！

「それじゃあ読み切ったようだし、詳しい命令は向こうで言うわ。頑張って人間のお友

達を作ってきてね～」

あぁもうダメだやる気だ…こうなったら手段は一つ…古明地家に伝わる最後の手段…!!

「お燐!!お空!!こいし!!逃げるわよ!!」

〝しかし時既に遅し…ペット達はみんな足元に突然現れた隙間の穴に落ちていった〟

「うにゃあああああ!?」「うにゅーーー!!」

「おりーーん!!おくーーう!!」

〝ペット二人が落ちていく叫び声を耳にした古明地さとりは、もう既にどうにもならない事にようやく気づいたのであった〟

「さあーて、スキマトンネル『日本S県左脇腹町』行き、開ー通ー」

「ぎゃあああああああああああああああ」

〝古明地さとりの初の外界生活。一体どうなるのか〟

第２Ｘ　Ψ終回にはまた?遠い

左脇腹町…スカイツリーが見える場所に位置し、Ｓ県という県に所属する
そこの北部のベッドタウンである中流エリア
住民の多くはマイホームを持ち、東京都へ通勤するサラリーマン家庭が大半を占める。庭付きの一戸建てが多く、夜になると閑静になるごく一般的な普通の住宅街。
そんな普通に溢れた住宅街を歩く登校中の一人の男子高校生…そう、僕である
髪は特に珍しくはないマゼンタピンク、頭には一般的なアンテナ、ただの緑のレンズの眼鏡
一見普通の男子高校生である僕だが、他人とは違う力を持っていた。
「大変だー!!子供が道路に飛び出してるぞ!」
「トラックが前に!!」「危ない!!」
『ボコォン』
「トラックが急にスリップしたぞ!」
「子供は無事だ!」
文章のみの表現なので、分かりにくかったみんなに説明しておこう。

走っていたトラックの目の前に、いきなり道路に飛び出した子供。
数秒後には子供とトラックは激突する場面
しかし幸い、トラックのすぐ側に曲がる道があった為、僕が強制的にスリップさせて事なきを得た。
咄嗟にトラックの運転手がハンドルを切り替えたのではないかと思う人もいるだろうが、残念ながらこれは僕の力だ
僕の…『超能力』でな
さて、いい加減僕が誰なのか気付いている人もいるだろうし、自己紹介させてもらう
僕の名前は斉木楠雄
『超能力者』である
ん？０Ｘで既に自己紹介しただと？何を言っているんだ。この小説で僕が出たのは初めての筈だが…

ーーーーーーーー

…何故だ
分身も配置してしっかり機能してた

押さえ込む力も充分だった、
マグマもテレポートを使って宇宙に捨てた…
なのに…何故だ…
何故マグマが急に増えたんだ…
何故分裂させたはずの噴火のパワーがいきなり復活したんだ…
…また時は進まないのか
これは原作の終盤…僕たちが旅行で忍舞県に行った時の話である
～３０分前～
原作Ψ終Ｘになるはずだったエピソード中盤に当たる
「楠雄！しっかりするし！」
噴火の阻止に失敗し、時を再び一年前に戻した。
その後は協力者である相トに支えられながら、瞬間移動で下山。
僕を演じるように頼んだ鳥束を回収し、具合が悪くなったので一足先にホテルに戻る事をあいつらに伝えた。
そして、僕はホテルの一室で頭を抱えていた。
午後３時程か…観光を楽しんでいるあいつらが戻るのはあと二時間くらいだろう。
その間は、テレパシーで雑音は入るが優雅な一人の時間をおくれる。

そして今、何をするか。優雅な一時…ではなく勿論『一人反省会』だ。
さっきも思ったが、僕と協力者（相ト）が配置した分身はしっかり機能していた。噴火のパワーを抑え込むのも完璧だった。噴き出すマグマも宇宙に捨てることができた。
しかしそこで謎の現象
マグマは謎の増加
分裂させたパワーの謎の再発
しかもこれは後になって気付いた事だが、増加と再発の直後、分身の何体かは地面から湧き出た虫のようなものを見て気絶させられたそうだ。
どう考えても自然な現象ではない事はすぐに理解出来た。
最低でもマグマとパワーは説明できても、噴火する箇所、しかも僕の分身がいる所だけに地面から虫が発生するのは違和感しかない。
大体マグマの熱で死ぬだろう。
これは第三者の介入で起こった事だ。それ以外に考えられない。
だとすると、何者かが噴火の阻止を阻止しようとした…しかし何の為にだ…それどころか、こんなマネは僕のような超能力者でないと出来ない。
虫を埋めるにしても、事前に知っておかなければ分身が地面を押さえ込む箇所ピンポイントで埋めるのは無理だろう

…ダメだ。全く見当がつかないしわからない
さっきも言ったように、僕と同じ超能力者が他にいる可能性も考慮するべきなのか。
霊能者や占い師までいるんだ。僕と同レベルの超能力者が潜んでても不思議ではない。
くそッ、もう失敗した後なのだ。今更クヨクヨしたって仕方がない。
時を戻した事で再び一年の余裕は出来た。今度こそ終わらせなければ
攻略法はこれで良い。邪魔さえなければ上手くいっていたのだ。これでいける。
今度こそ時を進めるのだ。もし邪魔する奴がいるのなら、今回のような噴火を再発させた元凶がいるのならば…僕は本気でそいつを消す!もう四の五の言ってられない。
やってやる!次こそは!!

「斉木!やっぱり戻ってたのか!」
「おお相棒どうしたんだ?クソでも長かったんか?お?」
「具合は悪くないかい!斉木君!」
「せっかくの旅行だってのについてねえな」
「いきなりホテルに戻るって言ったからビックリしちゃった」
「もしかして試食食べ過ぎちゃったとか?」

「斉木くん大丈夫？」

上から、海藤、燃堂、灰呂、窪谷須、夢原さん、目良さん、照橋さん

彼らは何故か僕に纏わりついてくる同じクラスの奴らだ。

…やれやれ。またこいつらに付き合わされるのか

困ったものだな

第３Ｘ　Ψ悪な朝か?来た!!

私の名前は古明地さとり、地霊殿の主…だったのですが、おんどれ隙間妖怪に日本に追い出された幸薄のさとり妖怪です。

目を覚ましたらベッドの上で寝ていました。地霊殿の私の部屋と同じ間取りと家具の位置で最初はただの夢落ちかと思ったのですが、起きて０．３１０６秒…サトリ秒で理解しました

そこには、地霊殿にはなかった普通の窓…そして窓の外には、地底では絶対にない筈の青い空と朝日が私を照らしていたのです。そして私は理解しました、ここは外の世界であると!

「ってふざけんな!認められるかーーー!!」

っと叫んでみたは良いけど…幻想郷ではないですねここ…窓の外には自然に囲まれた幻想郷とは違って周りには変な灰色のタイルが地面に貼られていて妙な形の家がたくさん建っている…

それにさっきの叫びでペット達が誰もここに来ないという事は、この家にいるのは私一人だけみたいです。

まさか一人暮らしをしろとか言いませんよね？
もう一度言うけど私に死ねと!?
「グッモーニンさとりんごきげん…ではないわね」
何を考えてるんだこの妖怪は！
逆さで出てきた隙間妖怪が苦笑いで話しかけてるが、今起きて最初に見るには刺激が強過ぎる。
あぁ～ダメだ…我慢できない！
「想起『ラストジャッジメント』!!」
「ちょちょっと!?なんで映姫ちゃんのスペカ使うの!?」
打ち出した弾幕はスキマに吸い込まれて余裕で躱されたが…慌てるのも当たり前だ。わざわざ相性の悪い人物のスペルカードを想起したのだからな！
「もうごめんなさいってばぁ…」
申し訳なく思ってるなら早く地霊殿に帰してください！
「大丈夫、異変の手掛かりを掴める事が出来たらちゃんと帰すわよ」
大体何で私が異変の調査をしなきゃいけないんですか…
博麗の巫女や人形を使うシーフじゃダメなんですか？
「だって…幻想郷の外で異変が起こっているのよ？霊夢を幻想郷から出すのは論外だ

し、魔理沙みたいに力押しでどうにかなる問題でもないし、私が対処するのは良いけどそれだと根本的な解決にはならないのよねぇ」

そう言ってお手上げですという表情で説明してくる。巫女とシーフが駄目なのはわかったけど、それでも私である必要なんて…

「ふふふ…これは貴女の為でもあるのよ?」

私の?

「だってさとりんずっと地霊殿に引っ込みぱなしじゃない?少しはコミュニケーションをとらないと不安なのよ～」

余計なお世話だ!大体私は何か忘れてるのかこいつは!

私は覚妖怪ですよ!人間と仲良くなれる訳ないじゃないですか!!

覚妖怪はいわばテレパシー使いです。私の胸元にある『第三の目（サードアイ）』で相手の心を読む。つまり、「二人だけの秘密ね」とか「さあ?知らない（本当は知ってる）」とかも読心してしまう。プライバシーもへったくれもない妖怪なのです。そのせいで里の人間は勿論地上の妖怪にも嫌われ、地底の妖怪達は嫌ってると同時に恐れています。まぁ地底に関しては私が地底のボスだというのもあるかもだけど。

そのおかげで妹のこいしは『目』を閉じるという事をしてしまったし…

とにかく!私が人間と仲良くなれる筈がないんですよ!

というかこいつ（紫）は絶対分かっている筈！なんだって私を地底のボスに任命したのはこいつなのだから！

「大丈夫よ。覚妖怪なのを隠していればどうとでもなるわ。ここは普通の外界とは違うのよ。」

そんな都合のいい外界があるわけ…大体バレたらどうするんですか。それに外界の人間達は髪はピンクの奴なんていないし、目の色がピンクなのもいるはずがない。嫌われるならともかく、残念な娘扱いされるのは我慢ならないですよ!?

「まぁ、仮にバレても大丈夫かもしれないけど…まぁ、百聞は一見にしかず。それじゃあ一週間だけでいいわ。どうしても無理なら幻想郷に帰してあげるし、大丈夫そうなら続けるという事で」

絶対無理だ…一日でギブアップするのは目に見えてる

…そういえば、ペット達は？お燐とお空と妹のこいしは!?

「あぁ大丈夫。連れて行けそうなペットは少しずつ送るわ。無理そうなのは藍達が面倒を見てくれるし。あと火車の子と八咫烏の子と妹ちゃんは…」

別の隙間に顔を突っ込んでた大妖怪は、いきなり隙間を閉じて真顔で私を見ます。

…まさか

「…てへっ」

うぉい!!なんて事してんだこの覗き魔!!お燐はともかくお空とこいしが外界で一人だと大変な事が起こるのはわかるだろうが!!特にお空はこの外界を焼却しかねないよ!?

「そんな怒らないで探すから!」

そして疫病妖怪は隙間の中へと消える。

もしこれで被害が起こったら私のせいになるのか?いやいやないでしょう…いや、でも火の粉が降りかかる事も…よし!もし被害が出てきて私に火の粉が掛かったら打倒隙間妖怪同盟軍でも作ろう!

そして、現在行方不明となった三人の安全が確認出来、現在は然るべき場所で休養をとっている事を伝えられました。

…十数分後

安心と不安を抱えながら、あの隙間妖怪からの支給品の一つ『パソコン』を使い、私が入学する学校のブログというのを見ています。

ＰＫ学園

開校２０年以上の私立高校。全校生徒数は５４２名。男子は白いカッターシャツと緑の上着とズボン、女子は緑の襟がついた白いシャツ（冬には上着を着ている生徒もいる）にスカートが制服となっている。（Ｗｉｋ○ｐｅ○ｉａ引用）

いや、あの作者なにまた引用してるんですか。

まぁ、それは置いといて、

隙間妖怪曰く、時間を巻き戻している存在はこの高校に通っているようですが…

高校生が？時間を巻き戻すなんて、冷静に考えると人間どころか強大な妖怪すら簡単に出来る事じゃありません。

こいしの友達の家には時間を自由に操る人間がいるらしいですが、巻き戻す事は出来ないと聞いています…人間が時を止めたり早めたり遅くしたり出来る時点で色々おかしいですが

この学園に地球ごと時間を巻き戻している元凶がいるなら、得意の神隠しで排除すれば良いじゃないですか。貴女なら何の問題もなく最も簡単にそれが出来る筈。

そう念じながら私の後ろで地霊殿から連れてきた一部の常識サイズ枠のペット数匹と戯れあっている隙間妖怪に問いかけ…みんな威嚇してるじゃないですか。そこの猫なんて全身の毛が逆立ってますよ

「私も見つけた時はそうしようと思ったのよ。永い時を生きる私達妖怪にとって、同じ

一年が繰り返されるなんて恐ろしいわ。どんな影響が出るかもわからないし」
　でも未だに排除に至っていない。巻き戻している理由があると言う事ですか?
「そういう事。これまで巻き戻った回数は７回、里の人間達や妖怪達も認知し始めたわ。１０回超えとかになったら力尽くで対処するけど、何かしらの理由があるというのならそうなる前にこっちも人材を派遣して動こうと思うのよ」
　成る程、でも何で私が派遣されたのか理由が未だに分からないのですが…
「別にさとりんじゃないと駄目って事ではないわ。本当は藍を派遣しようと思ってたけど…気まぐれってやつかしら?…ごめんごめん睨まないで。ちゃんとバックアップもするから…」
　気まぐれ…もう怒るのにも疲れましたよ
　移住生活初日の朝方から疲れ果てた私は、隙間妖怪が支給した制服を着る。緑の襟の学校シャツって珍しいですね。
「似合ってるわよさとりん!ＰＫ学園二年生１６歳。完璧じゃないの!あとはいこれ、学生証ね。」
　手渡されたカードを見て…いつの間にこんなの作ってたんですか…
「この世界のお金や必要な物はこのカバンの中よ。必要になったら言ってね?あと、火車の子なら割と早く合流出来ると思うから、安心して新生活を楽しんでね。あ、あとこ

れを使えば、いつでも可愛いゆかりんの顔が見られるわよ?」
そう言っておんどれ隙間妖怪から、カバンと押すタイプのベルを預かって…いやこれカバンというよりリュックサックじゃないですか?しかもギャグ漫画でよく見るどう見ても人間用じゃない大きさの…
そして妖怪は地面に隙間を出して消えていきました。
と思ったらまた床から顔がニョキっと…びっくりするのでやめて欲しいのですが
「そうそう、忘れてたわ。はいこれ。」
そう言って渡されたのは…指輪?一見ただの指輪にしか見えません。
「いきなり地上の人間達の心の声をいっぺんに聴くとさとりんは耐えられないと思うから、このゲルマニウムって素材の指輪を付けて外出しなさい。原理とか分からないけど、ほんの少しだけ読心能力を下げられるわ」
え?なにそれ?そんなのがあるの?というか、それって覚妖怪にとって猛毒なのでは?
「大丈夫よ。さとりんがグッスリ寝てる間に確かめたから安全ではあるわ」
へぇ、大丈夫だったんです…って人が寝てる時に検証してんじゃねえぞドグサレ隙間!!
「今のさとりんは能力が強まってる反面メンタルが弱くなってるし、これを付けないと

大変な事になると思うから気を付けてね。それじゃあ頑張ってね～」

おい待て隙間妖怪ババア!!

”古明地さとりの学校生活。果たしてどうなるのか”

第４Ｘ　少女登校中

（前回までのあらすじ）

いきなりおんどれ隙間妖怪によって『Ｓ県左脇腹町』の上流エリアの一軒家に放り出された私、古明地さとり。しかし、あれでも幻想郷の賢者である為逆らう事は出来ず、渋々と入学予定のＰＫ学園に行く準備を進めるのであった。

ーーーーーーーーー

登校日当日

隙間妖怪が寄越した地図を見ながら少女登校中

因みに、存在を忘れたら消滅する私達妖怪が外の世界にいて無事でいられるのは、「さとりんの境界を弄ればちょちょいのちょいよ！」…らしいですけど意味が分からない…まぁ私の存在が維持出来ているのなら特に言うことはないのですが。

そして隙間妖怪が置いて行ったゲルマニウムリングなる物ですが、最初から付ける選択肢はありませんでした。本当に害はないのか怪しかったというのもありますが、それとは別に大きな理由が二つほど。

まず一つ。こんな素晴らしい能力を封じてまで人間の世界で暮らす理由が全く見当

たらない。
そしてもう一つ。地霊殿の主にして覚妖怪としてのプライドが、こんなのを付ける事を許さない。
どんな災難が待っていようともこれだけは譲れないのです。沢山の人間達の醜い心の声を聞いた所で何ともありません。
ゲルマニウムリングなる物はペット達のおもちゃになってもらい、心底嫌な外界の外に出ようと、この家の扉を開けーーーーーー
”この時さとりの脳内にある衝撃が走った。それはまるで紅い屋敷の爆発音を至近距離で聴いたときよりも、妹のこいしが古道具屋からレンタルしてきた電池式拡声器を耳元で使用されたときよりも大きなものであった”
「ギャアアアアアアアア!!!?」

というわけでゲルマニウムリングをつけて外に出た所…おぉ、凄い。
さっきよりはマシになった…
どういうわけか、私の『心を読む程度の能力』はあり得ないレベルで強化されてしまっているようです。

基本私と読心の対象は、ある程度の距離になると聞こえません。可能な距離は長くてもおよそ半径１０メートル程度でしょうか。

ですが、今の読心可能範囲は恐らく、地球上にまで拡大。ようはつまり、煩い。すっごく煩い。発狂する程度に煩い！なんか言語なのかも怪しい声までするんですが!?

プライドは完全にへし折られ、観念してリングを付けてみると自分の周りよりも遠くの人間達の声はショートカット。多分半径５００メートル…今までの五十倍程の距離ですが、さっきと比べて河童の機械工場程度には改善されました。

これは確かに必需品かもしれない…

多分この家の中では大丈夫だったのは、隙間妖怪が結界でも張っているのでしょう。

まぁそれは置いといて

ここから目的地である学校までの距離は結構遠いですが、このくらいならギリギリで持つかも知れません。

十数分後

「ゼェ…ゼェ…ゼェ…」

まさか進めば進む程人間の数が多くなるとは…多分どいつもこいつも学校に向かっている人間ですね…

やたらめったらと周囲の人間の心の声が頭に響いてもう既に私の精神は瀕死の域…
おかしいなぁ私メンタルの強さには１１点を付けられるほど自信があったのに…
指輪の力で読心の範囲は減ったとしてもここまで近くなれば殆ど意味を成しません。
無いより良いのは確かですが
…しかも
（あー学校超ダリィー）
（あー授業超ダリィー）
（あー朝超ダリィー）
人間達の恨みがましい心の声がダイレクトに…
揃いも揃って高度宇宙虫菌菌だらけですかこの人間共は…！
もうあまり休んでいる時間は無いのですが、これ以上精神すり減らしてまで進むと力尽きて倒れるのがオチ…
という訳で近くの電柱にもたれ掛かって一息つけました…が
「大丈夫？顔色悪いよ？」
目の前に薄茶のボブカットの少女が。ちょいちょい、私は休みたいのだけど…
「初めて見るけど、もしかして転校生？」
「そ、そうですけど…」

「慣れない通学路だから迷ったのかな…じゃあ一緒に行かない？」
「え？」
一応内心でもやましい事は無いようですが…まぁ人間が持つ一般的な善意とかでしょうね。…って、この人間なんで私について疑問が浮かんでないの？
ピンクか紫か判別し難い髪の色に、胸元に浮いている『サードアイ』、それに繋がっている複数のコード。
普通疑問に思うか気味悪がるのが普通では？
なんて思っていると少女に肩を抱えられ、え？ちょっと？
「な、何をして…？」
「歩けなさそうだから、一緒に行こう」
普通なら結構ですと言いたいけど、本音はすっごいキツイ…
「…お願いします」
「任せて！」
初日でこのザマですか…どうやらこの世界では、私は地霊殿の大物では無く、人間に助けられるか弱い変な格好の女の子なんでしょうか…
そんな事を考えている私とは違って意気揚々と私の肩を抱えて学校に向かう少女…なんで私に対して色々な疑問の声が聞こえないのは気になるけれど、多分私が人間では

なく恐ろしい妖怪だと知ってしまうとどんな反応するのでしょうか。
怖がるかきみ悪がるか…
人間の愚かさを思い浮かべて、私は侮蔑の笑みを浮かべます。
…だが、この時私は知らなかったのです。
一見普通のこの世界。まさかある意味で私達の住む幻想郷の住人がまともに思えてしまう程、ギャグ漫画のように基本的馬鹿で構成されている狂った世界だったなんて…
因みに、学校にはギリギリで遅刻にならず無事に辿り着けました。いや無事じゃなかったですが。
（それにしてもこの子の髪の色、栗子ちゃんに似てるわね…）
慣れない環境への疲弊のせいか、さとりはこの声を聞き逃した。

第5X　Ψ凶転校生がやって来た

僕の名前は斉木楠雄。超能力者である。
僕は高校二年生として、新学期を迎える。
前回を読んでくれれば分かるが、地球を一年前に戻した事によって、再びこれで何度目かの高校二年生をやり直す事になったのだ。
全く。行事などに関してはほぼネタ切れ状態だというのに、これ以上今更二年生でやることはあるのか…
いや待てよ…何も行事が無いという事は、僕の学校生活は平穏なのではないか？
鬱陶しい奴らに絡まれずに、平穏な毎日を過ごせるのではないだろうか
ーーーーーーーーーーーーー
「よう斉木久しぶりだな。再会を祝して漆黒の儀でも執り行わないか？」
「おう相棒！春休み何してたんだ？お？俺っちはまたバイトクビになっちまったぜ」
知ってた。
いつも通り中二病全開とバカ全開の燃海ドウコンビ
今更何も思うまい

「またお前バイトクビになったのかよ今度は何をしでかしたんだ」
「おお？別のラーメン屋のバイトしてたんだけどな？出されたラーメンがうまそうだったんでつまみ食いしちまったんだよ」
「店員が客のラーメンつまみ食いすんな！」
　誰かさんと同じ事するのな
　この通り、中二病の海藤とバカの燃堂。この二人を中心に僕の周りにいろんな奴が集まってくる。こいつらがいる限り僕には平穏は訪れない。やれやれ
「よお久しぶりだな」
「亜蓮か、久しぶりだな」
「よお転校生」
「いや～春休み大変だったぜ。夜中バイク運転しているときにいきなりよ…」
　窪谷須…海藤と仲が良い元ヤンだ。最近は燃海ドウと共に僕の周りに集まる事が増えた。三人を中心にと言い換えるべきか
「そういえば聞いたかよ？今日転校生が来るみたいだぜ。」
「おいまたかよ。これで何人目だ？」
「お？でもなんかいつもより早くねえか？」
　確かに早いな。いつもなら夏休み明けの二学期恒例イベントの筈だが

「いくらなんでも転校生多すぎじゃないか？」
「最初に俺が転校して来たから…」
二組を含めると七人目か…いくらなんでも多過ぎるぞ
「転校生が来るんだってさー」
「へー」「またかよって感じだなぁ」
全員飽きてんじゃねえか
というか四人目（明智）の時点で既に飽きられてんだよ。大体これは原作でもなんでもないのだからいい加減最初の誰かさんでも消しても問題は無いと思うが。
そしていきなり教室の扉が開く。
「斉木さん！今日転校生が来るんですって!?女っすか？女っすよね!?」
出たな転校生1号（鳥束）。退場しろ
「うええ！酷く無いっすか!?開口一番が退場しろって！」
退場しろ
全く、この人数だと探偵劇でも出来るのではないか？
配役は…
佐藤広（主人公）
鈴宮（ヒロイン）

明智（探偵）
相卜（相棒）
窪谷須（連続殺人鬼）
才虎（殺人鬼を操る主犯）
鳥束（死亡被害者Ａ）
こんな感じだろう
「ちょっと待ってください!?あの腐れモブは転校生じゃないっすよ!?ていうかなんで俺が死モブ扱いになってるんですか!?」
【死モブ…殺される事で犯人の恐ろしさを引き立たせる為のある意味重要な役割を持つ死んじゃうモブ】
何を言っている?適役だと思うが?
「そっちが何言ってんすか!?大体主人公役がリア充じゃないっすか!ズルイっす!俺もリア充、いやハーレｍ（キーンコーン…）
早く教室に戻れ死モブ役
「さて、皆さん席について下さい」
（エロ先生きた）（エロ先生来たわ）（エロ先生…）

相変わらずのエロ先生呼びだな

僕のクラスの担任、井口工。名前と顔つきが変態にしか見えない為、最初は警戒されたり覗きの犯人にされたりしたが、教師としては優秀で良い先生だ。今ではクラスとは打ち解けている。偶に驚かれたりエロ先生と呼ばれたりはしてるが、良い先生である

「という訳で集会で話した通り、転校生を紹介します。女の子だから仲良くして楽しませてあげてね」

（楽しませるって）（いやらしい事に聞こえるわ）

（エロ先生の顔で言われると気持ち悪いな…）

こんな言葉だけでそんなのが思い浮かぶお前らの方が変態的で気持ち悪い

因みに当の先生はと言うと

「ハァ…ハァ…ハァ…」

頬を紅潮させて、息を荒くしている

周りには転校生に興奮してるように見えるが

（女の子か…　僕の事を怖がったりしなかったし、大人しくて良い子そうだったけど、クラスのみんなと打ち解ける事が出来るだろうか…頼れる先生として振る舞えるだろうか…あぁ緊張でお腹が痛くなってきた！）

緊張しているだけだ。

（女か…俺は胸が大きい子が）
（俺は尻がでかい子が）
（俺は少し太ってておっとりして上下でかい子が…）
　お前らの方が変態じゃないか
「転校生ってもしかして…」
「え？ちょぴっぴ知ってる？」
「うん、知っているっていうか会ったというか」
　しかし中々来ないな…テレパシーの反応が無い
『ガララララ』
　あれ？いつの間に？もしかして最初からいたのか。
「失礼します」
（ザザッ…）
　…あれ？不調か？
（細っ…）（背低っ）（少し可愛いけど幸薄そう）
（大人しそうだけど細過ぎるな）
（小学五年生なんじゃねえの？）
　変態的な男の心の声…正常か？

という事は…

僕は咄嗟に、教室に入ってきた転校生を見た。痩せこけた体に髪は僕と似たピンク色。何故か胸元に変な目が浮いている。

この浮いている変な目がなんなのかは気になるが、それよりも気になる事がある。

「ナガノ県から来ました…古明地さとりと言います。よろしくお願いします」

間違いない！聞こえないぞ！この女…

テレパシーが効いてない！

第６Ｘ　Ψ難種族覚

「それじゃあ古明地はここで待ってなさい。僕が入ってって言ったら、中に入って、前に来て自己紹介。緊張しなくても大丈夫だよ？みんな良い子達ばかりだからね」

いやあなたの方が緊張してませんか？

私はあの後、人間の少女の肩を借りてＰＫ学園に入り、保健室で休み、そして遂に転校の自己紹介へ。

それにしても、数分休んだだけで僅かですが良くなるだなんて…

今は２年巛組…３組じゃなくて？の教室の前で担任であろう教師から説明を受けています。

そしてその教師は明らかに頬を紅潮させて鼓動も早い。心の声も緊張で溢れている。

「あぁやっぱり分かっちゃうかな…君は僕がこの学校に来て初めての転校生だから、つい緊張しちゃってね。それに、僕が生徒に話しかけるとみんな警戒しちゃうんだ。なのに古明地は全く警戒しないからね。初めての事だからそういう意味でも緊張しちゃったんだ。」

あぁ成る程…

確かに目の前にいる教師の顔ははっきり言ってスケベと言わざるをえません。だけど彼の心は本物な変態と違って普通の、というより、普通に教師としてまともな心です。

私は内面さえまともであれば外見が悪くてもそこまで気にはしません。世の中外見がよくても内面がギトギトな存在もいますし

（キャピーン☆）

…おえ

「おっと、そろそろ時間だ」

そう言って教師は教室に入りました。そんな熱心な教師である彼には申し訳ありませんが、良い子達ばかりと言っていた生徒の疚しい心の声がバッチリ聞こえます。

（女か…俺は胸が大きい子が）

（俺は尻がでかい子が）

（俺は少し太ってておっとりして上下でかい子が…）

井口先生。貴方はとても良い先生なのでしょうが、このクラスの人間達はとても良い生徒とは思えません。まぁ私の素晴らしいこの力がない限り気付かないとは思いますが。

そして私は教師に入室の許可をもらい、教室の前に立って自己紹介…煩いですね誰が小学五年生ですか

凄い邪な心の声が聞こえて来てつい声に出しそうになります。…耐えろ…耐えろ私！ヘマやらかして制裁をくらうのは絶対嫌だ！

”そんなこんなで特に何事もなく挨拶は終了した。斉木が過去に行ったマインドコントロール（普通はあり得ない髪色に違和感を覚えないどころか普通に存在する）の影響により、古明地の髪の色やサードアイについては全く触れられなかったが、古明地本人がそれに気付くのはもう少し後の事である”

まぁ色々とツッコみたい所はありますが、特に何事もなく入学は出来ましたね…しかし、本当にこの施設の中に時間を巻き戻す力を持つ存在がいるのでしょうか…

「古明地さんよね？また会ったわね。顔色は良くなったけど大丈夫？」

登校中に助けてくれた人間の少女ですか。心の中は普通に心配してはくれてますね…覚妖怪が人間如きに心配されるだなんて

「あ、え、えっと、あの時はありがとうございます『夢原さん』」

まぁでも、あの時は助かりましたしお礼くらいは言った方が良いですよね…あれ？なんで怪訝そうな顔を？

「…私名前言ったっけ？」

あっ…マズイ！

気が緩んだらすぐにこうですか！正体を隠すって難しいですよ…

心の中を読んで人間の少女…夢原知予さんの名前をそのまま言ってしまいました。
流石にこれだけで私の力や正体がバレるとかは起こらないでしょうが、多少は不審に思われるでしょう。普通なら周りから気味悪がられる程度気にする必要は無いですが、調査を円滑に進める為にこの学校の人間とは仲良しごっこをしておいた方が良いですね…どうやって切り抜けるか…
「その…靴箱です。靴箱で覚えました」
「靴箱?…ええ!?あんなに朦朧としてたのに覚えてたの!?」
これは嘘ではありません。私を運んでる最中、この少女は『夢原』と書かれた靴箱で上履きに履き替えていました。でも流石に不自然だったでしょうか。確かにあの時私は目が霞む程の読心酔いを引き起こしてましたから…
(読心酔い…いっぺんに大量の心の声を聞いた時に起こる、読心持ち特有の酔い。症状は人混み酔いとほぼ一緒)
「あんなに苦しそうだった時の事を覚えてるなんて、古明地さんって記憶力凄いんだね!」
「は、はい、まぁ…」
危なかった…
やっぱり初日とはいえ人間達に溶け込むのは難しいです…ただでさえコミュニケー

ション最悪の種族なのに…早い所目的の人物を見つけて異変を解決させて地底に帰りたいです…はあ、巻き戻しの犯人どこですか…

”すぐ後ろに居た”

ーーーーーーー

”そして突然だが視点が変わり斉木サイドへ”

「今回の転校生は普通だな、変な目のアクセサリーは気になるが」

「あぁ、確かにな。才虎といい明智といい今まで変な転校生ばかりだったからなぁ」

（いや亜蓮も転校生じゃ…）

夏休み明け…ではなく、春休み明けの新学期にいきなりやって来た転校生イベント。今までの転校生にしてはアクセサリー以外控えめな特徴。周りは特に反応を示さなかった。しかしただ一人、この転校生に多大な興味…というより、警戒を敷いている人物がいる…そう、僕である。

僕は動物を含めた生物の心の中を読み取る事が出来る、そういう能力がある。しかも常時発動の為、僕の意思とは関係なしに読み取ってしまう。しかし、何故か僕の前の席に座る事になったこの女…全く心の中を読み取る事が出来ないのだ。

しかも、虫などの微生物、宇宙一の馬鹿と宇宙一の天才など、テレパシーが効かない存在は割と多いがそいつらとは感覚が違った。

あいつらの場合はそもそもなにも聞こえない。テレビ画面からだと相手の心が読めないなどの感覚と同じだ。しかし、この女の場合は違う。この感覚は、まるでノイズ音（ザザザーープツッ…ザザ）

正確に言うと、この女が何かを考えていることは分かるのだが、その内容がノイズのようなものに覆われて全く聞き取れないのだ。

初めての感覚だ。ただの声で煩いだけなら慣れたものだが、ノイズ音が直接頭に響くというのは中々キツイものがある。幸い女から目を離せばノイズが消える為そこまで支障は無いが。

周りの奴らはこの女を平凡な転校生に見えているようだが、僕には到底見えない。

もしかすると、僕や相トと続く新たな超能力者か？となると三人目になるか。もう一人いた気がしないでもないが、うむ、思い出せんな。

もし超能力者であるなら、あの大噴火の再発に関わる者の可能性もあるだろう。

いやしかし、なんの力だ…心の声をノイズで覆う能力なんて限定的過ぎるぞ

…やれやれ、今回の転校生も中々…いや、今までの奴らよりも曲者のようだな

第７Ｘ　主人公のΨ疑（前編）

〝四限の終わりのチャイム〟

ホッ…ようやくお昼休みですか…

授業自体は特に難しくはありませんでした。分からない問題が出ても周りの心の声を読めば大丈夫です。まぁ社会科とやらは結構大変でしたが…

「お腹空いたねー。古明地さん、食堂に行こっか。」

「は、はい…」

私は何故夢原さんと一緒に行動しているかというと…

ーーーーーーーーー

”前回の書き忘れ”

私と夢原さんが仲が良さそうに見えた井口先生は

（おー良かった、早速古明地に友達が出来たみたいだ。それに夢原なら大丈夫だろう）

…大丈夫？

「ちょっといいかな？夢原」
「いやッ!?…あぁ先生。びっくりさせないで下さいよー」
成る程、これがデフォですか
「いやーごめんごめん」
慣れてますね完全に
「夢原には古明地のお世話係をしてもらおうかな。学校の案内やルールを教えてあげてね」
「はーい」
お世話係…？
「よろしくね古明地さん」
ーーーーーーーーー
というわけで、夢原さんは私のお世話係に。
実の所一人で大人しくしていたいのですが、まぁ学校の事ほぼ分かっていないのでここは我慢ですね。
そうして一緒に食堂に向かっているのですが…
「ここの食堂美味しんだよ（まぁ美味しいファミレスってレベルだけど）。…そういえば、古明地さんってなんで転校して来たの？」

おっといきなり返答に困る質問が飛んできました。
まさか幻想郷に追い出されたとか言うわけにも行きませんし、この学校にいるかもしれない『時間を巻き戻す者』を探してるとか言っても訳わからないし…
「え、ええっとぉ…」
「あぁ、ごめんちょっと言い難い理由だったりした？」
あぁ、気遣いは出来るようですね。
「ま、まぁそうですね…」
「じゃあやっぱり聞かないどくよー（みこちんみたいに探している人がこの学校にいるかもしれないから転校してきたとかかも知れないしね）」
「ブゴォッ!?」
「えっどうしたの!?」
「いやなんでも、ちょっと咽せただけで…」
え？なに？なんて？どういうこと？もしかして私以外にも同じ理由でここに来た存在がいるって事ですか!?みこちんって誰!?
「おーいちよぴっぴー、一緒に昼メシ食わねー？」
「あ、みこちん」
早速みこちん!?って凄いガングロギャル!?

夢原さんがみこちんと呼んだ軽い喋り方の女子は、正にギャルでした。
「ああ転校生じゃん！そういやちよぴっぴがお世話する事になったんだっけ？」
まずちよぴっぴって誰？夢原さんの事？
それにしてもギャル…妖怪人間関係なくインドア派の私には相容れない存在です。
それにさっきから心の声が異界の言語で溢れているのですが…
（異界の言語→ギャル文字、ギャル語）
「アタシは相ト命、苗字は相性の相に占いのト、名前は運命の命を、みことって言うの。分かりにくかったら適当に呼んでもいいよ。確か、あんたは…古明寺さとり！」
誤表記！古明地です！
「めっちゃレアっぽくてイカす名前だから割とすんなり覚えたし！これからよろー！」
古明地ですからね？
心の中で指摘していると夢原さんが…
「そうだ！みこちん占いが得意ですっごく当たるの！古明地さんも何か占ってもらったら？」
「う、占い？」
「おお！良いじゃん！それじゃあなんでも言ってよ『さぽりんりん』！特別にタダで診てあげるよ！いつもタダだけど」

なんでいきなり占いが?え、ちょっと待ってくださいサポリンリンって誰ですか私の事!?

まさかのさとりんよりも酷い渾名に戸惑っていると、相トさんは少し怪訝な表情で

「もしかしてさぽりんりん占い信じてない系?」

占い…外の世界で流行っている合法のペテン業ですよね。ぶっちゃけ、私はそういうのは信じられません。大体が私の能力で嘘八百なのが分かっちゃいます。中には本気で信じている変な存在もいますが、多分このギャルもそいつらと同レベル…?

「まぁ、百は一にとか言うじゃん?信じるか信じないかなんてやってみた後でもいいっしょ。それじゃあさぽりんりんは何占って欲しい系?」

「何聞く?恋?相性?恋愛運?」

全部同じじゃないですか

それにいきなり占ってほしい事とか言われても…『視た』感じこのギャルの的中率は１００％のようですけど特に無いですし…まぁ、これで良いかな?

「…ええっと…じゃあ…『今私が探している誰かは何処にいますか?』」

ダメ元で占って欲しい内容を伝えると夢原さんが

「…え?古明地さん誰か探しているの?」

「あー…まぁ、誰か分からないのですけど、探さなきゃいけなくて。その為に私、ここに

転校して来たんです。すみません。ちょっと分かりにくくって」
「え!?そうなの!?もしかして、運命の相手とか!?みこちんと同じ的な!?」
夢原さん興奮しすぎです。語尾がギャル語になってます。
「マジ!?あたしみたいな感じ?オッケー!さぽりんりんの探してる運命の相手当ててやんよ!」
いや、運命の相手とかそういうのじゃなくてですね…
そう言おうとしましたが相トさんはどっかから出しためちゃくちゃ派手な水晶玉を見て…
「あぁ、メンゴ…よく分かんねーけど調子悪くて全然分かんなかったわ。この学校にいるって事しか…（ウッソだろ、いくら越して来た目的があたしと同じだからって、その探している奴まで同じとか奇跡を通り越して悲劇…え?どういう事だし?）」
「そう…ですか……」
私が少し暗い声で話すと…
「でもこの学校に運命の人がいるって事が分かったってことよね!?良かったね古明地さん!」
妙に鼻息が荒い…恋愛脳ですねこの人は
すると夢原さんは慌てた声をあげて…

「あ、大変！早くしないとお昼ごはん抜きになっちゃう…」
　そういえば食堂に案内されていたんでした
「じゃあ行こっか古明地さん。みこちんも一緒に…」
「ああごめんちょぴっぴ！そういえば用事あったんだった。昼メシは二人で食べててよ！（これって結構なサイテーな事かも知れないけど、あいつに知らせておいた方が良いよね。なんか嫌な予感もする）」
「え？そうなの？じゃあ二人で食べてるね」
　そして食堂へ
　元から少食の為、蕎麦を頼んで食べていると、夢原さんはさっきのギャルについて
「用事ってなんだろうね…なんだかみこちん様子がおかしかったように見えたけど…」
「そう、ですね…」
　適当に返答してると、いきなり夢原さんが身を乗り出して…
「…ところでぇ～探している人ってどんな人なの？やっぱり運命の相手？」
　やっぱりこの人恋愛脳すぎませんか？
　…その割には男運無さすぎじゃないですか？
　頭に入ってきた哀しい夢原さんのしくじり情報にどんな反応をすれば良いのか考えながら、私は黙々と蕎麦を啜りました。

…斉木楠雄…ですか

その人間が異変の元凶なら、何を企んでるのでしょうか…

第８Ｘ　主人公のΨ疑（後編）

”昼休みの続き”

図書室に本を返して教室に戻る途中、僕は聞き覚えのある声に呼び止められた。

「おーい楠雄ー。」

相ト命。この女は僕の正体を知る者の一人であり、占いを駆使する二人目の超能力者だ。そして僕の協力者でもある。

何のようだ？昼食ならもう食したぞ

「あぁ、いや誘いとかそういうんじゃなくて、今日転校して来たさぽりんりんについて気になる事があってさ。」

酷い渾名だな

しかし、古明地さとりか。前々回を読んでくれればわかるが、奴は燃堂や兄とは違う形で僕のテレパシーが通じなかった、超能力者かもしれない女である。

どのような能力なのかを調べる為に、さっきまで千里眼で観察をしていた所だ。僕は寄り目にする事で、離れたところにいる対象やその身の回りの出来事などを観察できる。　流石に千里眼を察知出来る力は持っていないようだったな。

それで、気になる事とはなんだ

「うん、その前にちょっち聞きたいんだけどさぁ…楠雄ついさっきオーラ消してた？」

…？消していないが、なんの事だ？もしかして今オーラが見えるのか？

「あぁ、いや…そうじゃなくて…あんまし驚かんといてね？」

どうした？珍しく歯切れ悪いな

「見えたんだわ…さぽりんりんのオーラ。」

そうか。僕のオーラに覆われているのに見えるのか。珍しい事もあるのだな

なんだと!?

「いや遅えし！確かにかなりヤバ目な事だけど理解すんのに六行も掛かんのかよ!!」

寧ろ六行で済んだ事が奇跡だと思え。これはかなり異常な事態だぞ。

相トは占いや予知の他に、その人物の過去や現在の性格、また、運気や才能や能力をオーラとして見ることが出来る。

ただこの能力は、相トが僕の半径２００メートル以内にいると使用不能となる。簡単に言うと、僕のオーラが大き過ぎて濃すぎる為、周りの人物のオーラが覆われて見えな

くなるのだ。

それなのに見えるという事は、奴のオーラは僕よりも濃い事になる筈だ。こればっかりは門外漢だから分からないが、恐らく僕よりも強い能力を持っている可能性がある。

因みに、どんなオーラだった？

「あ、うん、なんていうか、最初見た時は洞窟っつーか地の底っつーかそんな感じの暗めのオーラだったんだけど、よく見たら王様みたいな強い光も放ってたし、しかも暗闇の中にはうっすらと目玉みたいなのがいくつも見えて、なんか心の中まで読まれてそうでめっちゃキモかったわ。もしこの世のバケモンのラスボスとかがいたらこんなオーラしてんだろうなぁってマジで思ったし…」

どんなのか寧ろ見てみたいぞ。

…しかし、相トのオーラ診断は相手のことを知るのにとても便利な能力だ。だがまだ分からない事が多い。仕方ない。かなり文字数が増えてしまうが奴の力を借りるしかない

―――

おい聞こえるな？あの女が持つ能力を推理出来るか？

（ええ推理は出来ます。ただ普通では有り得ない事だらけなので断言は出来ませんし確実性はありませんが、それでも？）

ああ、予想を立てられるのは良い。奴に対して何も分かっていないからな

（分かりました、楠雄君のお役に立てる様に頑張りましょう。では軽く推理を…）

『まず楠雄君はテレパシー能力が効かないと言っていました。それ自体は今までで何度もあったようですが彼女の場合はいつもと違うという楠雄君の発言からして仕組みが異なるという事が分かります。そしてどう言った所が異なるのか』

『恐らくお兄さんや燃堂君のようにテレパシーを防がれる原因が違うのでしょう。燃堂君は恐らく考える事を直ぐに口にするタイプであり無言であれば何も考えていない故にテレパシーが通用しません。』

全然軽くはないな

『そしてお兄さんは楠雄君が頭に付けているヘアピンと似たカチューシャのような物も付けていました。お兄さん曰く楠雄君のテレパシーを封じるものである為通用しない事もわかります。』

いつ兄の所に行ったんだコイツは

『恐らく楠雄君のテレパシーは受信と送信の２種類がありトランシーバーの様な仕組みなのでしょうが、楠雄君の場合は任意である送信に対して受信は自動的に行われるもので、常にヘッドホンから幾つもの返答が届くような状態なのでしょう。楠雄君が常に騒音に悩まされている人と同じ表情をしている事からすぐに仕組みは分かりました。』

そんな顔出てたか？

『燃堂君の場合は本物のトランシーバーを装着して楠雄君に繋げておきながら楠雄君の目の前で話しているようなもの。お兄さんの場合は例えをトランシーバーからメールに変更すればわかりやすいでしょう。通信が届かない壁のようなもので故意に圏外にしている様なものです。圏外であればメールも届きませんし送信も出来ませんからね。』

ややこしいな。

『そして問題の彼女です。先程楠雄君は彼女の心の声がノイズに埋もれて聞き取れないと仰っていました。裏を返せば言葉が聞き取れないだけであり受信の妨害はされていません。ここが今までと異なる点です。そして聞き取れない原因のノイズは何処から来るのか。トランシーバーが電波を発している様にテレパシーも同じ様に電波を発しているとして、その電波が混信されていたと考えればどうでしょう。えぇノイズが走って聞き取れなくなってしまいます。』

おい作者、コイツを代弁者にしてないか？

『周りくどい補足や説明もここまでにして結論を言いましょう。』

最初から結論を言え

『結論からすると彼女は９９．９％超能力者です。しかもテレパシー能力に特化した超

能力者。恐らくですが彼女のテレパシーは楠雄君よりも強力である為彼女の声を拾えずノイズを起こしたのでしょう。少し話は変わりますが自己紹介の時はかなり具合が悪そうにしていたので外には慣れておらず昔は家に引きこもっていた可能性があります。何故家を出てここに転校しに来たかの理由は分かりませんが__』

長いもういい充分助かった

（おやもう良いのですか?これから彼女がテレパシー以外に使える可能性のある力を推理するのですが__）

それは自分で確かめる

ーーー

僕のテレパシーが効かない理由と何故ノイズなのかは分かった。かなり長かったがな。

しかし、僕よりも強大なテレパシーを使う超能力者か。最も苦労する能力だというのに、それよりも強力なのはいくら僕でも耐え切れないぞ。

他の能力も使えるのか気にはなるが、これはひとまず保留にしておくべきだな。

そして奴の近くにいる時は基本無の状態でいなければならないな。テレパシーが僕よりも強力ならば、僕の心まで読まれる可能性も

「それともう一つ。さぽりんりんがこっちに来た理由だけど、楠雄あんただわ。誰か解

らない誰かを探しているって言ってたけど、出て来た特徴があたしと全く一緒だったわ。」

そうか、相卜とほぼ同じ目的で転校して来たのか。あの女は僕に用事があると…

なんだってぇ!?

「いやまたかよ！しかもさっきより四行増えてんだけど！…それにしてもまさかさぽりんりん、楠雄が目当てだったとか、運命の相手とはちょっち違う気がするけど奇跡通り越して怖いわ…」

いや違うそこじゃない！いやそこも確かに驚くべき事だが、問題は別の所だ！

「…え？」

”楠雄説明中”

「…はあ!?あいつはもしかしたら心の中を読める能力を持ってるかも知れないしさっきあたしがはぐらかした占いの結果も普通にさぽりんりんにバレてるかもだし楠雄の事も鬼バレたかも知れない!?」

ご丁寧に説明ありがとう。つまりそういう事だ

…ん？いきなり正座してどうした？

「あたしはチャラ男と違ってバラす事は無いと思ってたのにまさかあたしがバラすとは思いませんでしたマジですみませんでした出来れば痛みが無いようにお願いします最期にノストラレベの大予言しても良いっすか命ワンパンになっちゃうからやる気は無かったけど死ぬ時になったらやってみたかったんだよね…」

落ち着け悟らんでいいし予言しなくてもいい、殺したりしないから大丈夫だ

「え!?マジ!?だってあたしのせいで…」

いや、今回は相トに非はない。奴が僕より高性能のテレパシーの能力者だとノーヒントで知る事は不可能だ。それに僕は千里眼で覗いていたと言ったが、テレパシーは奴のノイズで機能しなくなるので使えなかったし、相トに忠告する事も出来なかった。

それにお前が真っ先に僕に報告した事によって、僅かかも知れないが僕が奴について早く知る事が出来た。

「く、楠雄ぉ～…」

しかし、僕の存在に奴が気付いたのも事実。恐らく隠し通せるものでは無いだろう。そういう意味では相トが僕の存在を教えてしまった事は悪い事ばかりでは無い。こちらも聞く必要があるのだ。あの噴火に関わる者なのかという事をな…

ーーー

（学校の終わりのチャイム）

そしていつも通り何故か燃海ドウと共に下校

「今日の午後どうしたんだ？なんか上の空だったぞ？」

気にするな。心の中を空っぽにしていただけだ。

まぁ奴に僕の正体を明かすのは良いのだが、タイミングを計らなければどんなトラブルが起きるか予想が付かないからな。基本奴が近くにいる時は無の状態だ。

「おうラーメン食いに行こうぜー」

「だからなんで毎日毎日ラーメン三昧なんだよお前の中に飲食店はラーメンしかないのか！」

「じゃあ他に何か美味え店あんのかー？」

「んじゃあ今日はあそこ行こうぜ。駅前に新しい店が出来たんだよ。『スヌープ』って名前の店だったか？」

それもラーメンだな（スヌープ＝トマトラーメン専門店）

…しかし、奴は僕に話しかける素振りはなかったな。一応無の状態でいたとはいえ反応すら示さなかった。僕の存在に気付いているはずだが…何を考えているのか…

ーーー

多少は慣れてきたけれど地獄の様な帰り道を歩き続けて拠点に帰って来ました。一応今日の成果を大妖怪に報告しましょう。

…それにしてもかなり疲れました…あぁ、癒しが欲しい…

「ただいま～…」

［さとりさまーおかえりー！］

［［おかえりーおかえりー！］］

まだ小さい子達ばかりですが可愛らしいペット達がこちらに寄ってくる光景は癒されます。

大妖怪の結界によって静かになりましたし…

「おかえりなさーいさぽりんりーん♪」

（ゲンナリ…）

何故かソファに座って寛いでいる隙間妖怪…そして渾名…コイツ覗いてたな!!

「まぁそんなに怒らないで?良い友達ができたじゃない。これなら大丈夫そうね?」

あれの何処が大丈夫なのか詳しく聞きたいですが。まぁ良いです。ひとまず報告ですよ。異変の元凶の可能性がある少年が分かりました。名前は斉木楠雄。

「…ふーん。面白そうな子ね…」

ですが、結構目敏いですよ?多分ですが私が心を読む能力を持っている事も見抜いています。何かの能力持ちの可能性もありますよ。

「へぇ…ますます面白そう」

…何故でしょう。今コイツの目は

『幻想郷の敵を見る目』ではなく

『「この子面白そう!気に入ったわ!もっと覗き…オホン、観察してみたい!」な目』になってる気がします…

「さぽりんりん。次のやるべき事を伝えるわ」

まずさぽりんりんをやめてもらって良いですか?それと嫌な予感しかし無さそうなので拒否して良いですか?

「斉木楠雄…いや、くーちゃんかしら?とにかくくーちゃんと接触しなさい!この子の事を知りたいわ!出来れば後日でも良いから家に招いて!」

話聞いてますか?それと本格的に何言ってるんですか!?

”こうして苦痛の初日は終わりを迎えた。古明地は使命を全うする事が出来るのか!そして彼女達に目を付けられた斉木はの運命はいかに!”

いやふざけんな私を殺す気か!!

Ψ人と妖怪の出会い編
第９Ｘ　上位、Ψ強テレパシー

と、言うわけで私の地獄の学校生活二日目です。
あの隙間妖怪に彼の事を調べるように言われました。
にしても昨日、彼の心の声が聞こえないように感じたような…まぁ、疲れてましたし能力が機能しなかったのでしょう。そうに違いない。
「さとり様！いってらっしゃいませ！それとお気を付けて！」
（いってらっしゃい）
（いってらっしゃいさとり様）
私のペットの一人である今は人型の火車のお燐と数匹のペット達。
あぁ、行きたく無いなぁ…昨日の『高度宇宙虫菌菌』共の気持ちが少しだけ理解出来た所で、この家に張られた結界を抜けます。
ふむ、確かに昨日よりは負担は無いですね…
そうして歩いているうちに学校に辿り着きました。昨日の悲惨な出来事を隙間妖怪

に相談した所、境界を調節？してもらい楽にはなりました。周りの人間達の声は普通に煩いですが…

（あぁまさか登校中でお姿を拝めるだなんて！）（このお姿を拝むだけの為に学校に通っているのだ！）

…ナンジャコリャ

何故か男共が溜まりに溜まっています。いや溜まってはいますが、人が通れるくらいの道を空けて男共が群れています。しかも男共から聞こえてくる『声』があまりにもうるさ過ぎる…これじゃあ初日とあまり変わらない…

出来るだけ近付かないように正門を通ります。

「あ、古明地さんおはよー！」

む、夢原さん。現地民A的立ち位置の信頼できる人間が近付いて来ました。丁度いい、この男集りはなんなのか聞きますか。

「おはようございます、夢原さん。あの人集りは一体…？」

「あれ？気にしなくて大丈夫よ。心美が学校に来るとこうなっちゃうの。あ、心美は私の友達で…」

…成る程

照橋心美。そのあまりの美しさに、彼女に相対した男はもれなく挙動不審状態に陥

る。街を歩けば芸能人のごとき人だかりができて、石油王や大富豪にすら求婚させるほど。学力や歌唱力もかなり優秀、人当たりも良く、心優しいという完全無欠のマドンナであると…

よ～く分かりました。つまりは外見は完璧で中身がギトギトな存在だと言う事ですね。

そう私なりに性格捻じ曲がった『正しい』認識をした瞬間…

「来たぞ！」「照橋さんのお通りだ！」

その声に反応して正門を向きます。すると…光に包まれた青髪の美少女が…いや…えぇ…

そして周りからは謎の奇声が聞こえます

「おっふ照橋さん」「おっふおはようございます」「おっふ」（おっふ）「おっふ」「おっふ」（おっふ）（おっふ）「おっふ」（おっふ）（おっふ）「おっふ」（おっふ）「おっふ」「おっふ」

それ以降耳からも心からも聞こえる男達の声は「おっふ」だけとなりました。

「まぁ心美は本当に綺麗だもんねー。私も最初は友達になるまで近付きにくい感じだったし…あれ？古明地さん？」

――

《すぐ近くの女子トイレ》

「うっぷ…」

まぁ、そんな絶妙なバランスで同じ単語?を耳にすると酔いますね。音に酔うならぬ、おっふに酔う。『読心酔い』の上位種…

『おっふ酔い』…発症!

「絶対あの人間には近づいちゃいけない…!!」

男達に埋め尽くされて中身を見れませんでしたが、あの美少女…確かに外見は圧倒されてしまいましたが、照橋心美に近づくべきでは無いと、誓うことにしました。

(数十分後)

まぁ、私がやる事は『お友達』を増やす事じゃありません。私の後ろにいる彼…斉木楠雄についてを調べる事です。それにしても外見はかなり奇抜ですね。目がチカチカするピンク髪に、謎のアンテナはっ付けてどう見てもおもちゃにしか見えないメガネ…

…ん?今ブーメランだと思いましたか?分かってますよ、私の髪の色と『目』も奇抜に入るのは自覚してますから。自覚した上で奇抜だと言ってます。

まぁ、あんな奇抜な格好してて誰も言わないのですから、私程度の奇抜で反応しないのは普通なのでしょう。…普通ってなんでしょうか

それはそれとして、昨日は余裕が無かったので出来ませんでしたが、今日なら…何

をって？心の中を読むんですよ。さて、彼の頭の中は…

（やれやれ、今日の母が作ったコーヒーゼリーは最高だった。明日も食べたいものだ。）

おや？意外と普通な事考えてますね。

（やれやれ、今日のお昼は売店のコーヒーゼリーを買うと決めているんだ。早く午前の授業が終わって欲しいものだ）

いや気が早過ぎませんか？まだ授業始まってもいませんが…

（今日はたしかコンビニで新発売の生クリームとチョコムースが三層に重なったコーヒーゼリーが売られている筈だ。やれやれ、あいつらとは極力帰らないようにしなければな。最低でも３個は食したい。買い占めなければならないな。そこらの子供に買われる訳にはいかない…）

いや子供ですか!?ていうか貴方コーヒーゼリーの事しか考えていませんよ!?

（今日は頼んでおいた材料を母さんが買ってくれる筈だ。そしてそれをゼリーメーカーアルティメットハイパー（アニメ１９９Ｘ『Ψテク戦士１００円マン！』参照）で調理すれば…フフ、僕だけの絶品コーヒーゼリー男!!

もういいわこのコーヒーゼリー男!!

『ギョロッ…』

ーーー

ふむ…やはりテレパシーが通じないというのは不便だな。今でも最も厄介な力だと思ってはいるが、普段できていた事が出来ないというのは中々の違和感だ…それと心の中を読まれてるかもしれないというのは、こう言ってはなんだが、中々の不快感だ。

今僕の心の表面は、コーヒーゼリーの事で埋め尽くされている。昨日は奴に僕の正体を伝えるつもりでいたが、あれは嘘だ。まぁ途中まではそのつもりではあったが、本当にそれで良いのかと寝ながら考えた。結果、この方法を思い付いた。その名も『思考隠れの術』。

テレパシーを使う相手に対して、敢えて読ませる身代わりの思考を貼り付け、本当の思考を隠す技だ。今古明地が読んでいるのは、コーヒーゼリーに埋められた思考の身代わりだ。前回を読めば分かるが、恐らく奴は僕より強力なテレパシーを持つ。故に僕の考えている事も分かるかも知れない。その為の身代わりだ。

これで奴は僕を、スイーツ好きのただの学生にしか思えないだろうが、その通りだし良しとするか。

フフ、これを破らない限り、僕の正体を知る事は出来ないぞ。

「おう相棒！」

「おい斉木！」

燃海ドウか。この偽り（とも言えない）の思考を前に出しながらこいつの相手をする

のは疲れるが、やるしかないか。

――

…マジですか

本で読んだ１４歳ごろの男性の子供に現れる病気でなければ、彼は私と同じ力を持つ事になります。この世界では読心をテレパシーと呼ぶのですね。

にしても、表層意識を別のもので埋めて、本当の表層意識を隠すとは…素人の読心使いなら騙されてますよ。

まぁ私が驚いたのは他にも。それは、私が『心を読む程度の能力』を使う事を見抜いた事です。調査の為とはいえ上手く隠したと思ったのですが…

もう少し観察した方が良いですね。下手に接触すると警戒されてしまいますし、私は彼の心を読めますがどうやら彼は私の心を読めないようですので、慌てなくても良いでしょう。それと、勝った…！やはり私の能力は素晴らしい…

よし、まずは彼の交友関係ですね。

「おう相棒！」

燃堂力…説明が難し過ぎる見た目なので読者に任せます。そしてこれを言ってはいけないと思いますがこの人間は不良かただの馬鹿のいずれかですね…いや、多分ただの馬鹿ですね。不良っぽい事とか考えてないですし…というより何も考えてないですね

この人間。まるでお空みた…いえ、お空は記憶力がちょっと良く無いだけです。何も考えていないからとそれだけでお空と一緒にするのはおかしいです。それにお空は可愛いです。あんな馬鹿みたいな見た目の人間なんぞと…

「お?どうしたんだ?コーヒーゼリーめっちゃ食いたそうな顔してどうかしたのか?」

(なんで分かるの?怖い怖い)

つい彼と全く同じ事考えてしまいました。もしかしてこの人間、勘がめちゃくちゃ鋭いのですか?後で調べよう。ついでになんで彼が相棒と呼ばれてるのか

「おい斉木」

海藤瞬…彼は…

「お前、今度行われる新学期の確認テストの勉強しているのか?」

おや?意外と普通な…

「フッ、悪いな斉木。俺は完璧だぜ!まぁ勉強なんぞしなくても俺の漆黒のブレインがあれば__」

(腐ってそうな脳みそだな)

全く同感です。

成る程、病気に罹ってるのはこちらでしたか。因みに素は…

(今度こそ50位から抜けないと…)

おのれ、枷さえなければ本音暴露して楽しんでいたものを…

まぁそれは置いといて、成る程、気弱な本性をこの病で補ってる感じなのですね。虐めがいがありそう…

…まぁ、中々癖の強い人間と交流しているようで。少なくとも話しかけられる感じじゃないですね。

「おい外街(そとまち)どうしたんだよその虫籠」

「うわっなんだその蝶…いや蛾だろ!?スゲー気持ち悪い！」

「へへ、うちの前にめっちゃくちゃいたからな。ちょっと捕まえて持って来たんだ」

「いやちょっとかそれ!?３０くらいいないか!?」

私の隣の席で何してんですかこの人間達は…

黄色と黒の蛾。蛾自体はそこまで大きくはないものの、籠が大きいのでアホみたいな数がいます。数が多いと籠の中とはいえもの凄い光景です。

率直に言ってかなり気持ち悪い

こういうのって大体虫籠が壊れたりして大ごとになるのがお約束で…あれ？彼の思考が…

「斉木？どうしｔ…斉木大丈夫か!?おい斉木が気絶してるぞ！」

「うおーー!!相棒ーー！お！しっかりしろ！死んだのか！」

「いや気絶してんだよ！まぁよく分からんがまずは保健室にっておい燃堂揺らすな!!余計に飛ぶだろ!!」

お馬鹿そうな人間は気絶してる彼を意識どころか首が飛びそうな程揺さぶる一方海道さんは必死にツッコミ役をこなしています。もしかしたら我が家のツッコミ役（お燐）の代役に良いのでは？…って、そんな事よりいきなり気絶？…確かにさっきまであった『コーヒーゼリー』とか無くなりましたけど…

（やめろ馬鹿野郎!!）

「ブフォ!!」

あ、戻った…それにしてもの凄い右ストレート

「何すんだ相棒！せっかく助けてやったってのによ！」

（首の骨が外れるほど揺さぶった挙句人工呼吸という名の窒息をやろうとする奴をどうみたら助けてるように見えるんだ）

ごもっとも。楽にさせてやるの方がまだ見えます

（いやしかし驚いたな…もう少しで超能力が暴発する所だった。咄嗟に意識を切ったが、次は防げるかどうか…その前に、まずあの虫籠をどうするかだ）

いや意識を切ったとかどういう力ですか。というか、超能力って何ですか？…そういえば外の世界から来た変な人間も言っていたような…

それと、先ほどの気絶はあの蛾を見た事らしいですね。成る程、彼は虫が苦手と…
「お前どうしたんだ？というか大丈夫なのか？一応保健室に…」
（まぁそうだな。まずはこの教室から出た方が良いだろう）
海道さんとは普通に仲がいいのでしょうか。というより、このままだと話す前に彼が行ってしまいますね…まぁ良いか。別に話すタイミングは他にも
「うわやべ！一匹逃げた！」
あ、逃げた来た蛾が彼の目の前に…
（……!!!??）
次の瞬間、二つのことが起こりました
一つは、（バァァン!!）と見事に虫籠が爆発してしまい、大量の蛾が大脱走しました。
二つは、このクラスは大量の蛾が蔓延る地獄のような空間と化し、人間達の阿鼻叫喚が発生しました。
…まぁ、確かにこうなりますよね。あと暴発ってそういう事ですか
籠を爆発した彼は頭が真っ白になってますし、そもそも籠を持ってきたソトマチという人間は…
「…どうしよう…どうしよう…！」
ダメですねこれは…

「なんの騒ぎだこれは!!」
「みんな落ち着いて!いや無理だね!怪我しないようにするんだ!」
担任の井口先生とたしか生活指導担当の松崎先生。まぁこんな大ごとになると来ますよね…
「皆さん落ち着いてくださいこの蛾はキオビエダシャクというシャクガ科の仲間であり主にイヌマキを食い荒らす害虫ですが人体には特に害はありませんただ確かにこの通り大量に見ると中々凄惨な光景ですね。私が小学生三年生の頃校内で巨大な蛾の死骸をみてオシッコを漏らした時のような…」
何悠長に解説してんですかこいつは…
「お前ら!蛾如きにビビるな!!照橋さんを御守りするんだ!」
「そうだ!照橋さんに一匹たりとも近づけさせるな!」
「いや待てよく見ろ!照橋さんの周りにだけ蛾が飛んでいないぞ!むしろ避けてる!」
大半のこのクラスにいる男どもはなんか騒いでます…
全く…仕方がないので手を貸しましょう
ここで彼に借りを作るというのもアリですね
多分気付くと思いますし
――

「みんな！落ち着くんだ！まずは廊下側の窓とドアを閉めろ！そして校舎側の窓を開けるんだ！」
「クソがこっちくんじゃねぇ!!」
「お!?なんだこいつら！なんで俺っちの顔に止まんだよ!?」
「燃堂やめろこっち来んな!!お前の顔仮面被ってるみたいだぞ!?」
一周回って落ち着いて来たな…
僕は今、過去最大の窮地に立たされている。あのソトマチとかいう奴が持ってきた籠を破壊してしまった。そのおかげでこの有様だ。何処を見ても虫虫虫…そして今僕はどんな心境でいるのかといえば、爆弾を作動させるレーダーを身体中が覆い、一歩も動けない状態だ。もし動かそうものなら、爆弾が起動して爆発する様に、この部屋自体が大惨事となる。心を無にしているとはいえ、この惨状で耐えているのが不思議なくらいだ。
知っている人は多いだろうが、僕は虫が大嫌いだ。見た目が酷いというのもあるが、最大の理由はテレパシーを読めないのである。あの何を考えているか分からない生物が大嫌いなのだ。念力ですら触りたくない。
どうする…今なら誰も見ていない。瞬間移動で家に帰るか。いや、もし虫が一匹でも巻き込まれて僕の部屋にまで着いてきたら最悪だ。どうすれば良い…

「おい相棒！」

邪魔をするな燃堂！いまお前に構ってる余裕なんて

「おい見ろよ相棒！あいつら窓の外から逃げてくぞ！」

…なんだって？

”その光景は、斉木さえ困惑に値するものだった。クラス中に跋扈していたキオビエダシャクは、一箇所に集まった後吸い込まれるように窓の外から出て行ったのである”

…なんだこれは。こんな事があり得るのか？

「虫がみんな出て行くぞ！」

「しかもズレることなく真っ直ぐだ！」

「この蛾頭が良いのか!?」

いや、これは間違いない。テレパシーで命令されているか、念力で動かしているかだ。

しかし、わかっているとは思うが僕ではない。

もしこれが鳥などであれば僕も同じ事が出来るが、テレパシーの通じない虫では不可能だ。一体誰が…

そして僕は、虫が離れた事で動かせるようになった体でふと横を向いた。そこには、謎の目玉のアクセサリーを蛾の大群に向けている女…古明地さとりの姿があった…

…何なんだ、この女

第１０Ｘ　二人目　レディΨキック?

〝二日目の放課後〟

「今朝のあれ凄かったな。一匹残らず虫が窓に向かって…何だったんだ?」

「確かにあれは普通じゃあり得ないだろあの動きは」

「そんじゃあよ、ラーメン食いに行こうぜ?」

「まぁ今日は付き合ってやるよ。昼休みは食欲無かったしな。」

「あぁ、おかげで腹ペコだぜ。それと、あの虫籠持ってきた奴一週間は停学だとよ。まっつんにもしこたま怒られたらしいぜ。」

「まぁたしかに教室からも聞こえるくらい怒鳴られてたからな…」

「…そういやーよ、相棒何処行った?」

「もう帰ったんだろ」

ーー

《純喫茶　魔美》

ここは僕の行きつけの店だ。落ち着いた店内静かな客層。僕は時折り此処に来る。

やれやれ…今朝は大変な目にあった。ただでさえ僕が唯一苦手な虫が一匹…いや一

羽か、いるだけでも嫌だというのに…まぁ元凶はしばらく学校にこれないようだが、次同じ事をしようものなら退学になる前に退界してもらおう。まぁ虫籠を破壊してしまったのは悪かったと思ってるが

しかし、あの虫の不可解な動き…学校の奴らは奇跡だと言っているが、僕は知っている。あの古明地から発せられたような電波のようなもの…まさか奴は虫とも意思疎通が可能だというのか？僕のテレパシーの上を行くという予想も間違いでは無いだろう。僕でも拾えない小さな生物の思考を奴は拾えるのだから…

考え込んでいると、ここでバイト中で同じクラスの目良千里が注文を取りに来た。

「あ、斉木君。今日店長が考えた新メニューがあるの。自家製のコーヒーを使ったコーヒーパンに生クリームを挟んだコーヒーサンドなんだけど…」

貰おう。それとコーヒーゼリーも付けてくれ

ここのコーヒーは絶品だ。コーヒーゼリーも市販のものとは比べ物にならない。それを使ったコーヒーサンドなんて、美味いに決まって…あ、しまった。コンビニの新発売スイーツを全種類買い占めて金が無いんだった。仕方がない、今日はコーヒーゼリーだけにしよう。

「はーい」

まぁいい、今日限定でも無いんだ。いつかは食せるだろう

「いらっしゃいませー！…あ、確か…えっと」
「古明地さとりです。よろしく目良千里さん」
「あ、そうそう古明地さん！ごめんね、古明地さん私の名前覚えてくれてたのに…」
「良いですよ。これで覚えてくれれば」
よし、コーヒーゼリーもキャンセルだ。
何故ここが分かった。相トの占いじゃあるまいし。駄目だ、やはりノイズが邪魔で思考を拾えない。偶々来ただけで僕に気付いていない可能性に賭けて早くこの店から…
「じゃあ空いてる好きな席に…」
「あぁ、大丈夫です。そこの、今注文取り消して帰ろうとしている彼に用事がありまして」
！
「え？斉木君に？」
「ええ、それとついでに、新発売のコーヒーサンドお願いします。二つで」
!!
（本当にスイーツに弱いんですね…）
そして古明地は僕の席の向かい側に座った。
心を読めないから何を考えているか分からない。だが、こいつから見える微笑からは

良く無いものを感じる
…で、何のようだ。僕を甘いもので釣ったからと言って、話を聞いてやることしかしないぞ
「話は聞いてくれるのですね…じゃあ担当直入に言います。斉木さん、貴方は…超能力者…ですか？」
…ほう、超能力者の部分を周りに聞こえないように小さく聞いてくる辺り、事情は解るようだな
「まぁ明らかに隠してる様でしたし、周りも知らない感じだったので…それにしても割とあっさり白状しましたね。惚け顔一つすると思っていたのに」
昨日と今日のお前の動きで隠すのは無理だと思ってな、もし聞いてきたら素直に白状した方が良いと思っただけだ。それに、お前も似たような能力を持っているだろ？心を読めるとかいう奴にお惚け顔を晒した所で意味は無いからな
「ええ、その通りです。貴方と同じく、私に嘘は通じませんので。それにしても、私が心を読める力…貴方はテレパシーと読んでますが、いつから気付いてましたか？」
それは―
「成る程、最初の違和感は昨日私が教室に入った時、貴方のテレパシーが不調を起こしてそれの原因が私にある可能性があったと」

まぁ、そうだ。そしt―

「そして貴方の能力の一つである千里眼を使って私を観察していた所、あらゆる不審な言動や、貴方の協力者である占いのギャルさんからの情報から推測して私がテレパシーを使える可能性が出たと」

…

「そして決定的になったのは今朝の出来事、貴方はその姿を見ただけで気を失いかける程の重度な虫嫌いでもあり、そのショックで虫籠を…さいこきねしす?で破壊してしまいました。貴方は恐怖で身動きが取れない状況の中、私が虫と意思疎通を計り教室から追い出しているのを見て、と云うより感じ取って確信を得たと。まぁ流石の私でも精々指令を出すだけで虫の心は読めませんが。ですが感謝なら受け取ります。私の能力ならこれくらい…どうしました?今までにない嫌悪感を感じますが…」

お前、さては周りから嫌われてないか?

「あ、分かります?性分なもので」

そんな性分でよく今まで生きていたな

「これでもぺ…家族に指摘されて改善はしているんですよ。でも生まれつきの癖というのは中々取れません」

生まれつきか…僕と同じだな

「同情の必要は無いですよ。こう見えて私はこの力を受け入れていますし、嫌われるのも慣れています。ただ一つ不満点があるとすれば、私の住んでいる所は私を本当に嫌がっているので、対峙してしまうと私を「倒すしかない」って極端な選択肢しか出て来ないんですよ。私はそんなの望まないで話し合いで解決したいのに」

お前一体どこに住んでたんだよ、世紀末?大体話が通じないからそういう選択しか出来ないんじゃないのか?

「でも、悪い事ばかりではありません。一緒に暮らしている家族やペット達とは仲が良いですし、周りから嫌われているからこそあまり周りを寄せ付けないので割と穏やかに過ごしてますよ。でも最近は家族の繋がりで知り合いも増えてきましたが」

要は引きこもりだろそれ

「インドアと言ってください」

届いたコーヒーサンドを食しながら整理する。

話していて分かった。この女…想像を絶するメンタルを持っている。でなければ不可能な考え方をしているのだ。テレパシー能力を受け入れ、余人から嫌われる事も受け入れ、それでいて裕福な環境が整っている。

ふっ、コイツのメンタルは理解が出来ないが、こればっかりは尊敬に値するな。

…いや待て、おかしくないか?だとしたら何故古明地はここに転校してきたんだ?そ

れに今の所学校内で嫌われる言動を取ってはいない。寧ろ嫌われない様にしている節があった。それに相卜が言っていた、僕を探しているという転校理由…なんだ?恐らく僕の考えている事を読み取ったようだが、何故切なそうな顔をしているんだ?

「いえ、実は私の家族の友達の友達の腐れ縁の知り合いから、貴方に会うように命令されて…家ごと追い出されました…」

どういう状況だ。少なくとも、自分の意志ではないという事と、その家族の友達の腐れ縁の知り合いを嫌っているという事はよく分かった。やめろ詳しく話そうとするな。余計に疑問が深まる。とにかく何故そいつはお前を通して僕に会う必要があるのかそれを知りたい。…なんだ?何故そんな地獄の底みたいな顔をしている?

「…その…今は言えなく…まだ言うなって言われているんですごめんなさい…!」

正直だな。まぁそれなら無理には聞かないが、僕はお前の心を読めないのだから嘘で誤魔化す事も出来るのでは?…全てを諦めたような顔になってるのは何故だ?

「斉木さんは分かりませんが、私は心を読めるのですよ?つまり嘘も見えます。そして嘘をついた時のリスクも嫌というほど…」

あ、ごめんなさい。嘘をついた事がないから失念していた。

「でも嘘はつけませんが、本当の事を言わないのは出来ますので、斉木さんの事を秘密にしておく事も出来ます。」

あぁ、頼む。今の言葉でお前を信用出来るか色んな意味で怪しくなったがそこだけは本当に頼む！

まぁ理由は気になるが、疾しい事でないなら別に良い。

少なくともテレパシー以外にも扱える超能力者である僕の存在を幽霊から聞き出して弟子入りする為にここに引っ越して来た訳じゃないなら

「いや何ですかそれ。そんな阿呆らしい人間がいる訳…いるんですか？マジで？」

僕はお前の心は読めないが本心で引いているという事は分かるし気持ちも分かる。うっ…次いでにだが、その阿呆らしい人間がオマケ付きで此処に来る。

「え？頭痛？予知？（斉木さん誰ですかその女の子新しい彼女すか!?楠雄！なんでさぽりんりんと一緒にいるんだよ愛の誓いは!?）!?」

「あ、みこちゃんいらっしゃうわぁ!?」

「ちさぽよごめん！」「お邪魔するっす！」

嫌な展開だ…この喫茶店に相応しくない騒がしい同じ制服の男女が強引に店内に入って来た。

言うまでもない。相トとクズだ

「いや何で俺の紹介クズなんすか!?いやそんなことよりも、斉木さん誰ですかその女の子新しい彼女すか!?」

「楠雄！なんでさぽりんりんと一緒にいるんだよ愛の誓いは!?」
黙れ
「「ムゴッ!?」」
「え？今何しました？」
別に、手拭いを瞬間移動でコイツらの口の中に詰めただけだ
「いやクズって紹介してた方だけ多くないですか？それに貴方さっきは秘密にって…」
大丈夫だ。心の底から不愉快だがこの二人は僕の正体も知っている。さて、いい機会だ。コイツらにも自己紹介してもらおうか。
「ちょっと待ってください整理が追いつかないのですが？」
大丈夫だ説明する。そして古明地、お前に一言伝えておく。この名を言うのは癪だがな
「…え？」
ようこそ。超能力者達の集い、『ＰＫサイキッカーズ』へ

第１１Ｘ　二次でも集う！ＰＫ学園Ψキッカーズｗｉｔｈ？

前回までのあらすじ

”遂に打ち明ける事にした斉木に突如乱入した鳥束と相ト。今ＰＫ学園サイキッカーズが集結する”

――

「はぁ～!?なんでこの子に能力の事言っちゃったんスか～!?ってかこの子昨日の転校生の古明地さとりちゃんっスよね!?」

（うるさい。それとなんでコイツの名前既に知ってるんだ）

私は今困惑の中にいました。いきなりやって来た相トさんと見知らぬ男子が斉木さんの前で騒いで…いや相トさんは理解出来たのか落ち着いてます

「あ～やっぱ身バレしたか…問い詰められてゲロるしかなかった的な？」

（まぁな。一応僕が超能力者である事を隠してるのは理解してるようだが）

いや問いはしましたが詰めてはいませんよ

「くっ…楠雄の秘密を知ってる唯一女子ポジが…」

（それはどうでもいい）
　心底残念そうに諦観している相トさんでしたが、その横でクズと呼ばれた男子が…
「え？どういう事っスか？（なんで斉木さんはともかくあのおっぱいねえちゃんもこの子の事を知ってるように話してんスか？）」
「そういや楠雄、あのいけ好かねぇぱっつんは一緒じゃねぇの？一応アイツも知ってるんじゃね？」
（さあな。まぁアイツがいると更にややこしくなるから来ない方が良いが）
「いやちょっと待ってください!?どういう事っスか!?（アイツって誰っスか？なんでそのアイツも知ってるのに俺は知らされてないんスか!?）」
　もしかしてこの男子にはなにも知らされてないとか？斉木さんと相トさんは私の力を知っていて彼だけ何も知らないって、もしかしてそういう事？
　ですが彼の叫びを無視する様に相トさんは私に謎の勧誘をしてきます
「そんなことよりさぽりんりん。あんたはウチの『ダ』の正体に気付いたっぽいけど、どうやって気付いたの？やっぱり心を読んだ系？うちらＰＫ学園サイキッカーズに入ってみない？」
（ダじゃない）
「一瞬で否定されてますけど。それにＰＫ学園サイキッカーズってなんですか？情報が

錯綜してるのですが」
「だぁもう！無視しないでくださいよ！どういう事っすか!?この子は斉木さんの知り合いなんスか!?」
（やれやれ、こいつに態々教える義務なんて無いんだがな。一応聞くが、説明しても良いか？）
「えぇ、良いですけど、私にも説明して下さい」
（超能力者説明中…）
「成る程、貴方達二人と此処にはいないもう一人は何かしらの能力を持ってて、同時に斉木さんの正体を知っている方達と言う訳ですか。大体理解出来ました。」
（まぁ正確にはもう一人は超能力者ではないがな）
　私の向かいの席に右から相トさん、斉木さん、仲間はずれの鳥束零太さんの順番で座ってます
「それにしても思ったより知っている人間は多いんですね。それに相トさんは斉木さんの協力者なのも気付いてはいましたが、思ってたより仲も良いようで…」
「ふっふっふ、協力関係？バカ言うんじゃないし。あたしと楠雄は運命の相手どうし」
（違う）
「違うみたいですけど」

成る程、何かしら能力を持ってる人って個性的な方達が集まるのでしょうね。
「…なんでっスか」
え？
「なんで俺だけなんも知らされてないんすか!?斉木さんとこのおっぱいねえちゃんはわかるっスけどあのクソガキまで知ってんのに!!」
（何を言ってるんだ？お前に知らせる必要が無かっただけだというのに何故そこまで怒る？）
…もしかして、斉木さんって嫌いな相手には結構酷い人間？彼の心の中でこの二人の評価が月とスッポンなんですが、何故そこまで嫌って…
「そりゃ怒るっすよ！斉木さんの正体を知る第一人者の俺にだけ知らされてないなんておかしいじゃないスか!!それにこんな可愛い子と知り合いなのになんで俺に紹介してくれなかったんですか!?（くそうおっぱいはちっちゃいし暗そうだけど結構可愛いし一応口説いてみたかったのに!!）」
（知らねえよ。そして今の発言と思考で古明地のお前に対する好感度は地の底に落ちたぞ）
成る程、斉木さんがこいつを嫌う理由がわかりました。可愛いって心の底から言われたのにここまで嬉しくないどころか吐き気がしたのは初めてですよ。

「そんな事はどうでもいいっす！」
（よくは無いな）
　よくはありませんね。
「なんで俺には知らせなかったんスか!?仲間外れなんて最低っスよ斉木さん！」
（お前に知らせた所で役に立つとは思えなかったからな）
「グッ…！それに他にも文句はあるんすよ！ただでさえおっぱいねえちゃんやクソガキにバレてて俺のキャラ薄くなってんのにそんなペラペラ超能力だなんて喋っちゃいけませんよ！もしこの暗子ちゃんが斉木さんが超能力者だって事をペラペラ喋ったら」
（一番ペラペラ喋ってんのお前だよ）
　誰が暗子ですかこの人間。それに彼の言う通り貴方の方が喋ってますよね？
「さぽりんりん一応忠告しとくけどこいつがちでヤバいから関わらない方がいいよ」
「大丈夫です。もう既に関わりたくありませんので」
「ふん！そんな事より、俺達ＰＫ学園サイキッカーズの事を知ったからには、オーディションを受けて貰うしかないっすねぇ！俺達ＰＫ学園サイキッカーズの門は狭いっスよぉ～？」
　…は？オーディション？
　いきなり訳の分からない事を言い出したこの人間に続いて相トさんも…

「まぁそれには同意だわぁ、うちらはさぽりんりんの能力詳しくは知らないし。こればっかりはテストするしかないっしょ？」
「ふふふ、さあ見せてみろっスよお？あんたの超能力をよぉ～？」
（ノリノリだな）
　え？何これ、なんの茶番？
　――
　という訳で始まったＰＫ学園サイキッカーズのオーディション。僕はもう帰っていいか？
「駄目ですよ助けてください！」
　やれやれ、まぁ僕も古明地の能力については詳しく知りたかったし別に良いか。
「まず最初に聞くけど、あんたの能力は楠雄と被ってるのはマジ？」
「え!?そうなんすか!?ＰＫ学園サイキッカーズにようこそっす！」
　決めるのが早い。早すぎて古明地が困惑してるぞ
「いやどういう事ですか？」
「合格っすよ！斉木さんと同じ超能力を使えるとか、ＰＫ学園サイキッカーズとしては無視出来ない人材っす！」
　お前は黙ってろ。

しかし、実際はどうなんだ?テレパシー以外で使える超能力を持ってるのか?
「いや、流石になんでも出来たりしません。私が出来るのは心を読む事とちょっとしたことくらいですよ」
ちょっとした事ってなんだよ
「え?さぽりんりんがあたし達の考えてる事分かるのは知ってたけど…テレパシーだっけ?それだけしか使えないの?」
いやテレパシーを使えるだけでも相当だろ、僕基準で考えるな
でも確かに、テレパシー以外の超能力を持たないというのは不便としか思えないな。相当神経が図太い鋼メンタルでなければ耐えられないぞ…ただまぁサイコメトリーだけしか使えないよりは遥かにマシだが。あれは僕からして最もいらない最低最悪の能力だ。
ん?なんだ?急に不貞腐れたぞ
「む、それだけとは失礼ですね。こんな素晴らしい力は中々無いじゃないですか。どんな相手にも通用する無敵の力、10点中11点に値する最高の力」
自己評価クッソ高いなコイツ
「この力を馬鹿にするのなら流石に怒りますよ?」
「あー…ごめん（何故そんなに自信に溢れてんのか分かんねーけど）」

確かに、僕とは全く違う考えだな。僕のように仕方なく受け入れてる訳じゃなく、自らの誇りとしている。やはり…

「うわ～何それ？全然使えないじゃないっすか斉木さんのクソな所しか持ってねぇじゃないっすかうわカス～斉木さ～んコイツマジで欠点しかないっすよ～喋る前に消した方が良くないっすか～」

「……あ゛？」

女の子が出して良い声じゃない

しかし、鳥束の言い分も一理あるな。そうだな、消すとしよう。貴様をだがな…！

パイロキネシスを応用して塵一つ残さず消滅させてやる

それを聞いた相トは至極真面目な顔で

「いやどう考えてもあんたのオワ能よりは全然使えるっしょ」

そうだな、殆どが死にスキルなお前よりは普通に強力だろう

「いやなんで俺が貶されるんスか!?よく考えて下さいよ！使えないだけじゃなくて大体斉木さんと能力もキャラも被ってるじゃないっスか」

被ってないな

「目新しさに欠けるんスよ！ま、そういう訳でアンタは不採用っスよ根暗子ちゃん。どうしても採用して欲しいなら他にも能力をつけるっスよ～」

別に採用されたくは無いと思うが…まぁ恐らくだが、ただ心が読めるだけでは無いだろう。少なくとも、テレパシーに関しては僕の上を行くんだ。それにあの確固たる能力への自信…応用技を持っている。
「鋭いですね斉木さん…その通りです。今からちょっと実践しますね？ただ、割と危険な為斉木さんと相トさんには使えませんので口で説明するしかありませんが」
「(うわーさぽりんりんガチでキレてるわ、次いでに幽霊ヤロー精神的苦痛の相出てんだけど…って楠雄何その激レアワクワクスマイル!?)」
驚く事か？ただ楽しみなだけだが
「ふん、これまで数多の斉木さんの制裁を受けて来た俺に怖いものなんてないっスよ」
制裁の自覚があるのなら直せ変態クソ野郎
「へぇ、そんなに怖いのですね斉木さんの制裁って…良い情報です」
すると、人では出せない怪しげな笑みを浮かべた古明地は、目玉のアクセサリーを鳥束に向け、
「さあ早くしてみろっスよ！まぁどうせ被り能力の応用技なんて大した事ないっしょ―」
こいつの挑発を遮るように応用技を高らかに、宣言するようにそれを口にした

「『想起　恐怖催眠術』!!」

僕は一つの確信を得た。コイツを怒らせてはいけないと

第１２Ｘ　想起せよ　恐怖Ψ眠術

その時、何をされたのか俺には分からなかったっス

（おい待て急に何か始まったぞ）

あの根暗子ちゃんが叫んだ途端、俺は光に包まれた。それも、綺麗なイルミネーションとか、太陽のように温かな光でもなく、不安を煽ってくる光だったっス。

そして、心を読まれるような…

「ほうほう…本当に斉木さんから受けたらしい制裁が多いですね。まぁ殆ど自業自得な結果ですが…おっとこれは中々辛そうですね」

何故っすか…嫌な記憶が次々と思い浮かぶっス…特に思い浮かぶのは…あのキツかった三日間の断食修行…

「断食修行…あぁこれですか。確かに根深いトラウマになってますね。」

（あぁ、あの時のか。詳しくは２２２Ｘ借りの返Ψ！鳥束断食修行を参照だ）

珍しく心機一転して修行してたのに三日目に入った所で斉木さんが…

（記憶を捏造するな。大体同じテレパシー使いに嘘は通用しないぞ）

「トラウマは嘘をつきませんよ。それにしても余程苦痛だったようですねぇ…」

すると、根暗子ちゃんはまた高らかに…
「さあ、これからが本番よ！眠りを覚ます恐怖の記憶（トラウマ）で眠るがいい！」
呼び起こされる…あの苦しみが…トラウマが…
『想起　見捨てられた断食修行』!!
ーー
俺は神社の断食修行部屋に立っており、扉が閉まる音で目が覚めたっス
「しっかり見張っておるからな！外に出た瞬間この寺に居場所はないと思え！」
俺の住んでる神社の和尚さんの声が響く…そして俺は何かを信じて…そうだ！俺は信じてるんだ！この地獄の三日間を、斉木さんなら俺を助けてくれると信じて…！
『二日後』（なんだこのテロップ？）
来な～～～い…お～い斉木さん今でも聞こえてるはずなのに来る気配すら―
（凄いな。実際は二日経ってないのに『二日後』のテロップが出た瞬間衰弱したぞ。中々の再現だ。なんて応用技だ…）
「これが私の応用技、『テリブルスーヴニール（恐怖の記憶）』。相手のトラウマを呼び起こして再現する能力です。向こうは二日たったような感覚ですけどね。それにしても、斉木さんは貴方のことを嫌ってるのに何を根拠に来てくれると信じてるんでしょうか

…」

（僕より深く心を読めるお前が分からないのを僕が分かるはずもない）

「そしてなんですかあれ？なんで胸は肉まんで下着は生肉なんですか？純粋に気持ち悪いのですけど」

（妄想まで再現されるのか）

「まぁいいか。それじゃあ次のステップに…」

（次？あぁ、アレか）

『想起　根性叩き直しの咀嚼音』!!」

（さっきから宣言するように謎の技名みたいなのを叫ぶのはなんだ？）

「癖です。気にしないでください」

（どんな癖だ）

あれから三日目、斉木さんはようやく助けに来てくれたっス…

俺の初登場から借りがあるのか確かめたとか、助けた回数の方が多かったとか言ってたけど、大事なのは回数なんかじゃないっスよ。

「え？来たんですか？もしかして頼られると応えてしまう—違いますかそうですか」

（この状態でも僕の心も読めるとはな。まぁ本来なら放っておくところだが…気が変わってな）

そして斉木さんの手にはホカホカの肉まんが…ちょっ!?なに食ってんスかあんた!!…やめろ～!!モノローグに咀嚼音入れるな～!!

「容赦ないですね」

（こいつは三日飯を抜いたくらいじゃ生ぬるいレベルで人として問題が多過ぎるんだ。次いでにこれまで犯したこいつの罪をほんの一部でも清算してやろうと思ってな。僕からの親切心だ）

「殆ど私怨じゃないですか」

やめろ～～!!

――

ん?あぁようやく終わったか

良い叫びが聞こえた後、店から一番近い公園に立っていた。

「あれ?さっきまでお店に居たんじゃ」

迷惑になる前に瞬間移動で場所を移した

「は?」

それにしてもトラウマの再現か。僕も出来なくはないがここまで鮮明には出来ないし、断片的な再現ならともかくここまでフルは出来ない。とどめの『あれ』が無いのはお前の温情なのかは分からないが、体感的には２２２Ｘを見てた気分だぞ。

「そういえば確かに…ここまで鮮明に出来なかったと思うんですけど…まぁそれよりスルーしていたんですが、何故私が『（未だに魘されてる）アレ』の脳内に映した再現を貴方にも見えてたんですか？」

何故って別に普通だ。普通に『（未だに衰弱してる）アレ』に触れて、僕の能力であるサイコメトリーで感覚を共有してただけだ。

「いや感覚共有なんてしたら貴方まで衰弱しますけど!?」

問題ない。持ち込んでおいた食糧で凌いだ。回想での僕が食べている横でな

「なんでもありですね貴方ってホント」

「まぁ確かにウチらＰＫサイキッカーズって名乗ってるけどぶっちゃけ楠雄一人であたしらいらなくねって偶に思うわ」

なんだ居たのか相ト「なんだ居たんですか相トさん」

「居るに決まってるっしょあたしも超能力者なんだけど。まぁそれより、一体チャラ男どうしたん？いきなり衰弱するわ犬になるわ叫ぶわ…」

（少女説明中）

「へぇ…心を読めるさぽりんりんの事だからはっきり言うけど、性格めっちゃ悪じゃね？」

確かに、性格が悪くないとこんな技は思いつかないぞ

「…（流石に種族の性とは言えませんし）…自衛ですよ。」
　おい今の間はなんだ？
「うわぁーーー!!斉木さんの冷血ヤローーー!!」
　うるさい「あ、やっと起きた」「起きましたね」
　ーー
「この根暗女！よくもあんなトラウマを思い出させてくれたな！お陰で衰弱で死にそうだったっすよどうしてくれるんスか!?」
　変態クズ野郎激怒中…まぁ分からなくは無いが。今でもやや衰弱しているが、古明地の技はあくまで再現だ。しかし様子を見るに身体は大丈夫だが約三日は食べてないという精神的苦痛から来てるのだろう
「貴方がやって良いといったんでしょう？」
　トラウマを呼び起こす技とは言われてない
「貴方が私の力を馬鹿にするのがいけないんですよ。それにお忘れで？このトラウマ、最後はある意味メインとも呼べる締めがあるんですよ？でもやったら貴方も無事ではすみませんので途中で止めたんです。温情ですよ？」
　やはり温情だったのか。僕としては楽しみだったのだが。
「ぶっちゃけアレは私からしても意味不明で同情ものですよ」

古明地が僕を若干冷めた目で見る。しょうがないだろ、こいつにはこれが効果的だったんだ

「とにかく!アンタはＰＫサイキッカーズ入りを認める訳にはいかないっス!!というより、二度とウチらに近づかない事っすよ!!うわあああああ!!」

そう吐き捨てて去って行った。やれやれ、古明地に対する恐怖が感じ取れる辺り、見事にトラウマになったようだな。まぁ、アイツに嫌われても何の支障もないし、寧ろこれで古明地は付き纏われなくて済むな。当の本人が満足顔してるのは謎だが

一方アイツと違って相トは古明地に対して好意的だ

「まぁ別にアイツいなくてもあたしと斉木だけで充分なんだけど。それよりさぽりんりん。アイツはああ言ってるけど、気にしないで全然平気よ平気。アンタの能力、結構性格悪いけど、割と困った時に役に立ちそうじゃん?」

「まぁそうですね。忘れた事を思い出すのにも有効ですよ。」

「マジ!?それかなり便利じゃね!?よっしゃ、アイツの言葉なんて無視無視。ＰＫサイキッカーズオーディション合格よ合格」

まだ続いてたのかそれ

「いや私はそういうのにはあまり…」

「じゃあさ友達なら文句ないっしょ?ぶっちゃけ女子の超能力者は初めてなんだよ

ねぇ」
「（中々グイグイ来ますね。私の能力知ってもここまで近づく人間は初めてですよ）…はい」
　おい、今のは気圧されての承諾に聞こえたぞ
「しょうがないでしょう!?こんな事なかったんですから！」
　どんだけ友達いないんだよ
「貴方が言いますか!?…いや貴方割といますね友達」
　は？

ーー

　ようやっと二人と別れて帰宅途中、私の身体は予想以上の疲弊に襲われました。この世界で能力を使った所為かと思いましたが、どう考えてもこれは相トさんのアタックが原因ですね
「はぁ、なんか疲れました。直射日光浴びてた気分…真っ直ぐ好意をぶつけてくれるのは良いですけど勢いが強過ぎます」
　そうぼやきながらターゲット、斉木楠雄と接触できた事にホッと胸を撫で下ろしました。そういえば彼と接触する為に寄り道したんでした。色々あって忘れかけてました

…

（少女帰宅中）

「ただいま～」

家の扉を開けた途端、癒しの声が

［お帰りなさいさとり様！］

［遅くまでお疲れ様さとり様！］

「お腹空きましたさとり様！隙間だけに」

「帰れ!!」

ペット達に紛れて猫撫で声で寒いギャグを言う隙間女に向けて叫びました。

「それで、接触出来たの？さとりん」

いやどうせ覗いてたでしょ貴女。知ってますよね

…それよりも鉤括弧無しで喋るのが懐かしく感じますね

「フフフ、大正解！それより、ＰＫサイキッカーズ入団、おめでとー」

貶してますよね？無力な人間のお遊び集団に入る私を

「あら？どうかしら。人間もその気になればとんでもない偉業を成し遂げる者ですわ」

貴女の人間に対する評価はどうでも良いですよ。それより、次は何をすれば良いのですか？もう帰してほしいのは諦めましたよ

「ええそうね…まぁ、ぶっちゃけ彼と接触出来た時点で最初の目的は達成されたし、来るべき時まで特に指令は無いのよ」

…は？

「まぁ、来るべき時まで学校生活を楽しむ。それが指令という事で」

おいふざけんな！来るべき時っていつ!?

「正確な日時は分からないけど、時間が巻き戻る日？」

それまでここで待てと!?いやホントマジで私を殺す気か!?

「そんなつもりは無いし大丈夫よ。来週の月曜日に学校でイベントがあるでしょ？その時に私も動くわ」

…因みに、そのイベントって何ですか？

「授業参観」

なんでそれが月曜日に!?

”多くの学校は、月曜日に授業参観が実施されるのは少ないのである。しかし、このＰＫ学園はその少ない部類に入るのである”

――

ようやく解散した。何故か帰る僕に相トが付いて来ているが無視しよう

「それじゃあ楠雄どっか行こうよ」

帰る

「うわ、ノリ悪。そういや楠雄はさぽりんりんについてどう思う系？」

どう、とは？

「いやほら、おんなじ心を読むでしょ？似たような能力持ったダチ公出来て嬉しんじゃないかって…はっ！もしかして好きになったり」

なってません

…しかしそうだな。確かに、テレパシー故の苦労、それによって鍛えられたであろうメンタルの強さ。彼女の本性は分からないが、それでいて落ち着いた性格。まあ、共感できる苦労人が現れたのはそこそこ嬉しいだろう。…だが、恐らく僕は

〜

「そういえば彼、超能力者かしら？ホントなんでも出来るのね。ますます気になって来ちゃったわ！」

へいへいそうですか、と料理しながら適当な返事で流します。

いつまでここに居るんですか。

「そんな事より、貴女は彼をどう思ってるの？同じ心を読める存在…仲間意識まではなくとも、少しは貴女も興味を持ったんじゃない？」

そんな事より…まぁ確かに、まさか心を読む能力を持つ存在がいた事は驚きでした

ね。…でも、多分私は

～

絶対に分かり合えないだろう

決して分かり合えないでしょう

古明地一家　日常のΨ難編
第１３Ｘ　相性Ψ○!?　完璧美少女と覚少女

”美少女…類い稀なるルックスを持つ少女の事
そしてそれを体現する美少女が、このＰＫ学園にいる”
【♪いつものｂｇｍ♪】
「はぁ、今日も照橋さん綺麗だなぁ…」
「見てるだけで負の感情が消えてくよ…」
”男達の小さな（つもりの）羨望の声…そしてその声の先には一人の美少女がいた”
（はぁ、もうちょっと離れたところで言いなさい。聞こえないふりするのも大変なんだから。それにジロジロとチラチラと見るのもいるし…まぁ言いたくなるのも見つめたくなるのも分かるわ。なんたって私は完璧美少女なんだもの。それにしても斉木君、全く私を見もしないわね…）
やれやれ、今日も照橋さんは羨望の的だな。僕はそんな生き方はまっぴらごめんだが。
照橋心美…この通り自他共に認める完璧美少女だ。何故かはわからないが、彼女は僕

に好意を抱いている。
…羨ましいと思ってはいないだろうか。この小説…というより、原作を見てるみんなら分かるはずだ。僕は目立つ事が嫌いだ。目立たない為なら僕は全超能力を使う事を惜しまない。
その為、注目の的である照橋さんは、絶対に関わりたくない相手なのだ。
それに、彼女の本性も戴けない。初期よりは友人も増えた事でマシにはなったそうだが、それでも表に出さない自分中心な本性は心を読める僕には通じない。
（もう、相トさんの占いで斉木君の好きなタイプを知ったのに…あの時はそのまんま私かと思ってたけど、私じゃまだ足りないと言うの？…いや、そんな事はあり得ないわ！だって私は―）
早く諦めて欲しいものだ…
―
「え～、来週の月曜日の六限目は授業参観です。君達の家族に、自分が頑張る姿を見せてあげましょう」
井口先生はそう言ってますが、周りは特にやる気が無いみたいです。
「うわぁ今更授業参観とかなぁ」
「後ろに親がいると全く集中出来ねんだよなぁ」

心の声と普通の声が大体重なってるのを思うに本当に消極的なんですね授業参観…
そんな私も余計に人が増えて心がもっと煩くなるので嫌ですが
まぁ私には全く関係無いですね。参加についてのプリントは初日に渡されましたが、
そもそも私達には親がいないので。妹はいますが
常識を持ってるとはいえ流石にお燐を行かせるわけにはいきませんし…

放課後…
さてと、帰りますか…
私は持ち物を整理し終えて教室を出て考え事をしてました。
喫茶店で知り合って以降、私は彼…斉木楠雄と話していません。一応なにか私に聞こうとしているような思考が読めるのですが、なにを警戒してるのか肝心の内容は閉ざされてて分かりません
…いや、他人の心を読める能力を持つ存在が身近に居ればそりゃ警戒しますね。実際に他人の心を読めて且つ危険性をよく知る者なら尚更…え？私は警戒しないのかですか？私の考えている事は彼には聞こえないようなので必要はありませんね
それに心を読める能力を使える人間が他にもわんさか居たとしても私にはまず敵いませんし敵うとも思っていません

（相変わらずの自画自賛だな古明地。現在僕は千里眼を使用して古明地を観察している。何故か、答えは単純だ。あいつの心が読めない以上、先日の会話だけでは信用出来ない。もっと具体的に観察する必要があるし、もし大噴火に関わるのならば気をつけなくてはいけない。因みに、心は読めないというのに何故古明地の地の文は読めているのかというと、それは説明が長くなるのでまたの機会だ）

もういっそこちらから聞いた方が良いかなぁ…でも多分私とは関わりたくないでしょうね。

さてと、今日の買い出しは…昨日のカレーの残りでいいか、ペット達の餌も残って―

（あ、おいそこバナナ―）

【つるっ】

…つるっ???

【ドデ～ン!!】

（転び方がサマーソルトキックを放ったかのようだ）

数秒後…

「イッダァ…」

一瞬頭が真っ白になって覚醒した私は、天井を見ながら頭と背中からの痛みに呻いていました…

な、何で床が滑って…それに一瞬上下が逆になったような…

起き上がって未だに痛む後頭部と背中を摩りながら原因を探して…ありました

バナナの皮…ふざけんな!こんな古臭い方法でなんの脈略も無く私を転ばせんじゃないですよ作者!!というか、こんなこと前もあったような…

皮肉でも何でもない正真正銘のデジャブを感じながら、こんな廊下にこんな物を捨てた犯人を探そうと決めていました。何故か確証は無いのに咄嗟に浮かんだ唇アフロのモブ男の顔を振り払って顔を顰めて立とうとすると…手?

「古明地さん、大丈夫?」

「……」

目の前には、先日の朝はちょっとしか見る事が出来なかった、もはや天使、女神と言っても過言ではない美少女…

の皮を被った自尊心の塊で構成された絶対に関わりたくない女が私に手を差し伸べました。

(見事な辛口評価)

身体を痛めてて本当によかった…何故なら彼女の心を読んだ一瞬、私の顔は嫌悪感満

載だったのですから
「あ、ありがとう。大丈夫です。立てます。」
　本能か故意か何故か彼女の手を借りずに立ち上がった私は、目の前にいる彼女の顔…というより心を読む
「(私の手を掴まないなんて…まぁ女の子だからかな。もし男子だったら私の手を掴む事に感激したんだけど…) あぁ、良かった」
　いやいくら自尊心高いからってそれは過剰過ぎませんか…
(残念ながらあり得る。そしてそいつは感激のあまり二度とその手を洗わなくなるだろう。何故断言してるのかだと? 前例があった。それだけだ)
「照橋心美です。挨拶が遅れてごめんね古明地さとりさん(フフ、緊張してるのね? でも恥ずべき事じゃないわ。貴女も中々の美少女だけど、残念ながら私は美少女という概念の元生まれたような存在だもの。自信があったのなら悪い事しちゃった)」
　サラッと「上げて落とす」をくらったんですが!?
(原作よりも自己評価が過大になってないか?)
　ここまで自己評価高いと清々しさすら感じる嫌悪を必死に隠してお礼を言います。
(お前の能力に対する自己評価も大体そんな感じだろ)
　なんだか癇に障るツッコミが聞こえた気がしましたが、

「アァ…ハイ…ヨロシク…」
　カタコトにはなりましたが幸いな事に緊張故と受け取ってくれました。
（凄いな、僕でもここまで嫌悪を抱く事は無かったぞ。やはり同性となると受け取り方は違う物なのか）
　それにしても、さっきは流しましたが…
「私の名前、私と何処かで会ったりしました？」
「え？ううん、新しいクラスの友達だから。覚えてないと失礼だって思ったの。良い名前ね（フフ、完璧美少女がクラスメイトの名前を知らないなんてことあってはならないわ。男子達だけじゃなくて女子達の名前もしっかり記憶してるのよ。それにしても変わった苗字で覚えやすくて良かったわ）」
　覚えやすいから良い名前って貶してますよね？自尊心の塊どころか腹黒ですか…いや待ってください？今サラッととんでもない事言いませんでした？
（早くも気付いたか、そう…照橋さんの凄いところは高い自尊心じゃない…）
「…どうしたの？」
「え？いや、喋った事無かったのに私の名前を覚えていたのに驚いたので」
　え？待ってください？この人まさか…
「…そうだわ。一緒に帰らない？古明地さんの事もっと知りたいし（完璧美少女として、

転校生についても知っていないといけないし、斉木君を探したかったけどこれは良い機会だわ！）」

　何故に斉木楠雄？…まぁ、ぶっちゃけ私は嫌ですけどちょっと気になるかも…

「はい」

　ーー

「照橋さんさよっふなら！」「おっふ照橋さんまた明日！」「さよっふなら！」「「さよっふなら!!」」

　…さよっふなら？

「みんな、また明日」

『『さよっふなら!!』』

「（放課後の「おっふ」はこれで９５おっふ、いつも通りね）」

　だから「おっふ」って何ですか!?先日の朝以降毎度聞くおっふに頭を悩ませます。どいつもこいつも心の中までおっふだから毎朝酔いかけますよ。彼女と関わりたくなかった理由の一つがこのおっふです！…まぁこればかりは彼女の所為ではないと思いますが

「…どうしたの？具合でも悪いの？」

「いや、『おっふ』ってなんなんだろうと思って…」

「…おっふ?」

いやなんで何も知らないフリしてんですか数えてたでしょ!?

「なんでもないです。そういうスタンスなら良いです…」

「そう?（スタンス?）古明地さんはナガノ県から来たのよね?どんな所なの?」

いきなり答え難い質問ですね!?

「どんな所…と言われても辺境というか…ど田舎というか…地の底というか」

（地の底ってなんだ?）「（地の底って何!?…この部分はあんまり詮索しない方が良いのかもしれないわね…完璧美少女は野暮な事を聞いたりしないのよ。例えクラスメイトを知る為だとしてもね）そうなんだ」

へぇ、気遣いは出来るのですね。無神経なぶりっ子という訳では無いと…

…まぁ詮索して来ないというのは正直助かります。嘘は吐きたくありませんし、かと言って馬鹿正直に「????の????から来ました」とか言って変な奴扱いされるのも困ります。

（おい待て、なんだこの伏字は!?）

「それじゃあ、友達とか出来た?」

これまた答え難い…あぁいやそうでもないか

「えぇ、少しですけど…」

「そう!古明地さん可愛いからもっと友達が出来るし、人気者にもなれるよ!」

嫌われ者の私が人気者？ほざきやがれ
あと貴女のような人間に可愛いって言われても嬉しくないし信用出来ません！
…まぁ私の事を知らないからしょうがないと思いますが、逆にこっちから質問してみましょう。
「人気者と言えば…前々から気になってたんですけど、照橋さんって男子達からの人気凄いですよね…何か秘訣とか努力とかあったりします？」
「ええ、秘訣？そんなの無いよ～。でも努力か…強いていうなら、みんなの事を大切に思ってる事かなぁ」
（やれやれ、古明地にはそういったあざとさは通用しない。さっきのような嫌悪丸出しの…どうした？愕然とした顔になってるぞ？…あぁ、そういう事か）
「（フフッ、秘訣なんてある訳ないわ。私は神に愛されて生まれた存在。努力？笑止ね！私は完璧美少女なのよ。クラスメイトの名前や特徴を覚える事くらい当たり前。大した事じゃないわ）」
やっぱりそうでしたか…大した事あるでしょうよ…
（そう、照橋さんの凄いところはその努力だ。テレパシーレベルの洞察力を持っているという部分もあるが、それを差し引いても照橋さんの努力は並大抵のものではないのだ）

　そうして話していると、別れ道が
「あぁ、私こっちですので…」
「そうなんだ。また明日ね古明地さん。お話楽しかったよ。（フフッ、これで古明地さんについて幾つか知る事が出来たわ）」
「はい、また明日…あと、最後に一つ聞いて良いですか？」
　そう言えば彼について何も聞いてませんでしたね。
（おいやめろ。めんどくさい事になる）
「ん？何？」
　斉木楠雄について何か―
「…貴女、疲れたりしてません？今日に限った話ではなく」

「…え？（…え？）」
（…え？）
「…あ」
　…やっちまった
「何でもないです。野暮でした。さようなら」
「えちょっと古明地さん!?」

そうして私は、家まで早歩きで帰り着きました。
（…何を考えているんだ、この女は…やれやれ、最後にとんでもない爆弾を置いていったな）
――
古明地宅
「た、ただいま…」
「あら、さとりんお帰りなさい。…大丈夫？肩で息してるけど」
一難去ってまた一難とはこういう事を言うのでしょうか。ペットで溢れてるリビングで寛いでいる隙間妖怪が…というか、この展開これで３回目ですよ。いい加減私も飽きたんですけど。
「まあ良いじゃない。多分これから『日常』になるだろうからこれで最後だと思うわよ多分」
何を言ってるんですか…
「それにしても、さとりんが人の事を心配するなんて…それとも、読んでしまった以上口に出さずにはいられなかったとかかしら？」
…特に咎めたりはしないのですね。貴女の心からは怒りを感じません。
「まぁはっきり言うと、此処だと能力を知られてもさとりんが動き難くなるだけで特に

支障とかはないのよ。それに、今さとりんは人間に近い存在にまで境界を緩めてるし、余程勘が鋭くないと妖怪なんて思われないわ」

おいなんだそれ初めて聞いたぞ?もしかして、周りを混乱させたりしないように能力を隠し通した私の苦労って…

「あぁ…あんまり意味は無かったかなぁ?」

おいこら…

「まぁまぁ怒らないでさとりん。そうだ。一応書いておいたわね」

そう言って配られたのは…今日の終礼で配られた授業参観保護者参加申し込み書…

『出席』にチェックが入れられており、保護者との関係は…養母?

そしてそこに書かれている保護者名は…『八雲紫』っておい!?

「そんな怖い顔しないでよ。本当なら古明地姓でも良かったのよ?でも私には霊夢がいるし…」

いやそんな事どうでも良いですよ!!それに気持ち悪いから二度と古明地を名乗ろうとしないでください!ってそうじゃなく!なんであんたが私の養母に!?

「あぁそっちね?本当は義姉にしようと思ったんだけど、藍に「やめて差し上げてください本当に」って真面目な顔と声で言われたのよ!?酷くない!?」

藍さんグッジョブ!!

でも出来れば養母もやめさせてほしかった!!
とにかく、私は怒りのままその紙を破り捨てて…
「あぁそれ見せる為のコピーなのよ。本当の紙は随分前に隙間を使って送っちゃった♪」
だろうとは思ったけども…
最悪だ…今までの人生で一番の最悪な出来事だ…
全く慣れない学校生活五日目
遂に待ちに待った二日の休日が始まりました。
そして、私は。
この二日間迫り来る授業参観が行われる月曜日を恨みながら引きこもって過ごす事になったのは、言うまでもありませんね…

家に帰り着いた美少女は、彼女に聞かれた事を反芻していた。
「(『疲れてる』…なんであの子私が疲れているなんて…確かに、斉木君がいつまでも私に

おっふしなかったり、最近琴のお稽古でいつもより０．１％だけ調子が出なかったりはしたけど…）…もうちょっと古明地さんの事知るべきね」

そして開いた扉…そこには…

「心美〜!!来週の授業参観、ロケ抜け出して俺も来るからね!!」

「やめて?それに不参加で提出したから（もしかして今私が疲れてる原因お兄ちゃんなのかも）」

第１４Ｘ　ちいΨ王様　一目惚れ物語

”土曜日のお昼頃、人間も比較的多く通る道を歩く一匹の猫がいる。いつも人々に甘やかされて呑気に過ごす野良猫。そんな彼にも出会いの春が訪れる”

[ごきげんよう読者奴隷の諸君。いきなりニャが僕は猫である。名前はアンプとかス○ーレットとか『ヴァ×イオレット』とか色々あるがただの野良猫、この町の王様にゃ

みんなも知っての通りこの世界は猫が支配してると言っても過言じゃにゃい。

原作はもちろんこの作品の８割は僕の人気で成り立ってると言っても過言では__]

いや過言だろ。

今回がお前の初登場Ｘだというのにどこまで厚かましいんだアンプ。

[ンニャ!?お前いつから!?]

このＸが始まってから最初からいたぞ。

やれやれ、やっぱり出てくるのかこの野良猫。

こいつは僕の周りを彷徨いていた原作斉木楠雄のΨ難の自称マスコットの猫だ。この通りあらゆる存在を下に見ている傲岸不遜な性格の可愛さも愛らしさもない、自称でもマスコットとしてどうなんだという感じの猫だ。因みに品種は分からん。知ってい

る人がいたら一応教えてくれ。

［おいこら！マスコットキャラとしての品格を下げる紹介してんじゃニャい!!（おのれ…普通なら僕のような愛らしい猫を見かけたら人間は皆僕を撫でる為に媚び諂うニャ。しかしこの人間は全く僕を撫でようともしないニャ…いや一度撫でられたニャ？）］

ほら、この通り。僕はテレパシーで動物の声も聞こえるし、動物の発する鳴き声は人間の言葉に変換されるからこいつの内心も丸聞こえなのだ。こんな品格も何にも無い本性を聞かされて普通は頭を撫でようとは思わない。

因みに、なぜ［］を使用しているかというと、人間と動物の台詞を同じ枠に入れて解らなくなるのを防ぐ為だ。ただこれ以上増やしても逆に分かりにくいか？

［まぁ良い！僕はこの作品でもマスコットキャラとして活躍してやるつもりだからニャ。そしてこの作品からお前の居場所を奪って主役になってやるニャ！］

マスコット志望じゃなかったのか？

そもそも本編で五話しか出てない上に最終的にはうちの飼っているロボット猫にマスコットの座を奪われてフェードアウトされておいてこの作品でも、とかよく言えたな。

まぁリベンジに燃えるのは勝手だが、この作品なら僕の家に飼われるとでも思ってい

るのか？母さんが猫アレルギーなのを忘れたのか？

［ニャフフフ、甘いニャ人間。この僕がそう簡単に人間に飼われてたまるかニャ。そうではニャく、この作品は書くも書かぬも自由な二次創作ニャ。原作に対する影響を受けぬ。そして、多少の細かい設定を無視しても問題はニャい。］

大有りだろ。

［つまりあの女の猫アレルギー設定を無視する事も出来る。そうすればあの猫ロボの居場所は無いニャ！］

馬鹿なのかこいつ。いや、ありもしない希望に縋っているのか？

まだ僕の家族は登場してないが、母さんは普通に猫アレルギーだしそのロボ猫は今でも家に飼われてるぞ。マスコットとやらは諦めるんだな。そもそもこの作者がマスコットを必要としてるかも怪しいぞ

［ぐぬぬぬぬ…フン、まぁ良いニャ。お前が堕ちないニャら、もう一人の主人公を堕とす事にするニャ］

…は？

［ニャフフ、とっくに調べは着いてるニャ。この作品の主人公がお前だけじゃニャい事くらいはニャ。ま、もしかしたらお前とは会うことはニャいかもしれニャいニャ。］

そうか。それじゃあサヨウナラ

[別れの餞別として、撫でくりまわす事を許して…っておいニャガ!!無視するニャ!!]
やれやれ、全く喧しい奴だ。しかし、おそらくもう一人の主人公は間違いなく古明地だろう。あいつも僕と同じ動物の心を読めると思うのだが…まぁ良いか。帰って本でも読むとしよう

――

[フン。僕を撫でれる最後のチャンスだったというのに、主人公がアイツだけでないニャら、あんなのとはもうおさらばニャ。こうニャったら、もう一人の主人公を僕の可愛さでわからせて平伏させてやるニャ。そうすればつられてあいつも…]
「きゃーこの猫めっちゃ可愛い!!」
[やれやれ、人間どもが群がって来たかニャ。まぁ腹も減ったし、もう一人の主人公を探す前に腹ごしらえでも…]
「私黒猫めっちゃ好きなんだ〜!」
「寝顔が可愛い〜!!」
[チッ、やっぱり同業者か。それにしても寝顔を晒すニャンて中々のあざとさニャ。]
「みて!この子尻尾が別れてるよ〜!」
「本当だぁ!猫又みたい!不思議〜!」
「可愛い〜ヨシヨシヨシヨシ!!」

「あーズルい～！私も～ヨ～ショショショショ」
ワシャワシャワシャワシャワシャワシャワシャワシャワシャ…
［無遠慮の撫でまくり…いやこれは撫でるじゃニャくて触るニャ。フン、下等生物が調子に乗りおって。もし温厚なそいつじゃニャく僕だったらその面に傷を付けていたニャ。ま、とにかくこの人間どもから餌をねだるのは無理のようだし、さっさと主人公の下に…］
（ブッチィ!!）
「ニャルガクルガァ!!」
バッ！
「うわぁ!?」「何!?」
ペシッ！
［なんニャ…アレ…］
その時、僕は見てしまったのニャ。さっきまで不届きな人間二人に良いようにされていた同業者が、人間の一人に渾身の一撃（※猫パンチ）をくらわせ、勢いのまま空を舞っている姿を…
［…ニャんて綺麗ニャフォームのジャンプだニャ…］
スタッ…

「フカ～～ッ!!」
「いったぁ…何よこの猫！いきなり飛び起きたと思ったら！」
「うわっ、凄い威嚇してる。フー!!って言ってたよ!?」
「もう行こ行こ！」
そう言って人間共は立ち去る。はっきり言ってザマァみろニャのだが、僕はそんなことより、
一撃を放った猫は、雌の黒猫だったニャ。そして痩せこけている訳では決してニャいスラリとした身体。所々ある赤い模様がそれも見事なアクセントになってるニャ。
そして二股となっている尻尾…普通に考えたらおかしいが、それすら気にならない美しさニャ…
未だにやや逆立ってる体毛と不満げな表情で次なる昼寝スポットを求めて去る彼女…
僕は…僕は…
プシュー…
この子に恋をしてしまったニャ…
（夢原さん並に惚れる速度早すぎるだろ）

第１５Ｘ　異Ψ猫、火焔猫燐

（ＰＭ　０：３０）

実の所でも無いが、前Ｘの続きだ

前Ｘ僕は家に帰ると言ったが、今僕は購入した甘い物を食す為に公園のベンチを目指す。

やれやれ、まさかお使いを済まして家に帰る途中に移動販売が、しかも期間限定のコーヒーゼリーを取り扱う出張屋台が通り掛かるとはな。コーヒーゼリーの魅力には勝てなかった。

しかし、前回のアンプの初登場Ｘはアッサリ終わった気がするな。もしや作者がただ考えなしにアンプを出したがってただけか？

まぁあいつは原作の登場話数も参考資料も少ない。この調子だと、今作でも計５話程度でフェードアウトする可能性もあるな…５話も出ない可能性の方が高いが…

もう会うことの無いであろう野良猫の事を頭から消して、僕は公園のベンチに座る。

では、おやつには早すぎるが食すか。

[む…また人間かい？はぁ…]

ふと聞こえた不機嫌声に目を向けると、いつの間に僕の隣で寛いでいる黒猫がいた…いや待て、なんだコイツは？黒猫だが、所々が赤い体毛はまだ良いとして、尻尾の先の毛が上に行く程赤から黄色に変わっていってる。まるで燃えているような色合いだ。

いやそこは別に良い。僕の力が原因とはいえ僕のようなピンク髪がいても不自然な扱いをされない世界だ。この様な毛の色の猫が居ても不思議では無い。

問題は尻尾の色ではなく、本数だ。

尻尾が二本、しかもただ枝分かれしただけの尻尾ではなく、元から二本あったかの様になっている。

[ちょいと、おにいさんがここに座るとせっかくの日の光が塞がれて日陰になっちゃうじゃないか…まぁどうせまた通じないだろうけど]

まるで普段は通じてる様な言い草だな。

「うにゃっ!?」

僕が聞こえているとも知らずにタメ口を吐いていた謎猫は、いきなり脳内に直接話しかけられた事で飛び起きた。凄いな、二本の尻尾が良い感じに動いて先が焔のようだぞ。

[な、なんだい？今おにいさん、あたいの言葉に反応した？でもなんで？]

別に、聞こえたから反応しただけだ。

［いやなんで通じてんのさ…というかさっきから喋ってないのになんでおにいさんの声が聞こえるの？］
だろうな。お前の脳内に直接話している。
［はぁ!?］
それで、退いて欲しいのか？
［いやそんな事より、おにいさん何者!?］
別に、ただお前達動物の心が分かる超能力者だ
［え…］
そうして謎の猫は硬直した。
なんだか新鮮だな。今まで何度か動物と話した事はあったが、ここまで普通に驚かれた事はなかったぞ。
驚きはしてもすぐさま受け入れる事が多かった。
…だが、コイツが驚き、硬直した理由はもう一つ別にあった事を知った。
［そのピンクの髪にこの時のあたいの言葉が分かる…もしかして、おにいさんが斉木楠雄かい？］
…は？
何故コイツ僕のことを知っている？

僕は一気に警戒を強めた。なんだか嫌な予感がする。そしてその予感は的中した。
謎の猫は僅かに驚きを見せた僕を見ると、途端に驚愕から歓喜に変わって
[やっぱり!さとり様の話を聞いてから会ってみたかったんだ!あぁそうだ。これも何かの縁だし、自己紹介でも…]
予想だにしなかった人物の名前が上がり、僕は驚愕を抑えられなかった
さとり…古明地だと!?
[あたいの名前はお燐(りん)。さとり様のペットさ!会えて嬉しいよ超能力のおにいさん!]
やれやれ…アンプ以上に厄介な動物に出逢ってしまった…
人懐っこい表情で自己紹介を始めたお燐という猫を見ながら、僕は心の中でため息を吐くのだった。
――
あたいの名前はお燐。さとり様に飼われているペットよ
これを読んでるみんなは知ってるだろうけど、お燐って言うのは通称で、本名は長くて好きじゃないからみんなにそう呼ばせてるんだ。
そして勿論、あたいはただの猫じゃない。
猫妖怪、火車さ!

〈火車（かしゃ）〉

全国各地で見られる妖怪。

葬式や墓場に現れて死体を奪うと言われ、正体は猫とされることが多い。

古くから猫は魔性の物とされており、その俗信と地獄からの迎えである「火の車」、死体を好んで食す妖怪「魍魎（もうりょう）」などの観念が結びついて生まれた妖怪と考えられている。

東方大百科より

またしてもコピペである

勿論この世界だと尻尾が二本ある普通の猫として過ごしているよ…普通ってなんだろうねホント。

一応人型になる事もできるけど、危ないからあまり出来ないね。楽だから良いけど猫と彼等以外で会話が出来ないのはちょいと寂しいねぇ。

それに、この世界の人間達は猫の気持ちをわかっちゃいない。起きていて、頭を数回撫でるのならいざ知らず、昼寝しているときにも遠慮なく、しかも身体中を触ってくるものだから嫌になってしまうよ…

さとり様は地底に帰りたいっていつも言ってるけど、ぶっちゃけ同感さ。いくら地底の妖怪でも珍しく安全だとか言われているあたいでも我慢出来かねるよ

そんな折、さとり様から聞いたんだよ。「同じ心を読める能力を持っている人間がいる」ってね。基本生きている人間に興味が湧かないあたいだけど、是非とも一度会って見たいと思った！

そして、目の前に会いたかったおにいさんが！

――

お燐と名乗ったこの謎猫は僕に興味の視線を向ける

やれやれ、面倒だな。まさか古明地のペットに偶然出会うとは…それにまさかの放し飼いとは何を考えてんだか

［いやぁ、家の居辛さに耐えられずに外に出た甲斐があったってもんだよ～。さとり様、昨日の夜からすっごく落ち込んでてねぇ。今朝見たら部屋もジメジメしてたしキノコも生えていたんだぁ］

一晩でどうやったら部屋が湿地帯みたいになるんだ…まて、落ち込んでるだと？あの化け物メンタルの古明地が？

僕よりも心が鋼で構成されており、超能力を不要だと考えている僕とは正反対にテレパシーを自分の誇りとして受け入れている古明地がそこまで追い込まれるとは、何があったんだ？

［…数回しか会ってないって聞いたのによく分かってんじゃん。流石だね…］

合ってはいるんだけど反応に困る僕からの古明地像を聞いたお燐は微妙な顔で理由を話す。

［おにいさんって、さとり様と同じ寺子屋に通ってんだよね？］

学校を寺子屋って言う猫初めて見たぞ。

［明後日だっけ？イベントがあるんだろう？確か『呪業讃歌』ってやつ］

そんなカルト的宗教団体の歌を歌うイベントが学校であってたまるか。授業参観だ。

［さとり様、それがスッッッゴく嫌みたいなんだぁ。理由は教えてくれなかったけどさ。それでもう家がジメジメしだして…］

成る程、放し飼いではなく脱走だったのか

［いや、あたいがここにいるのは逃げた訳じゃなくて日課の散歩だよ…まぁ外の空気を吸いたいとは思ったけど］

正直だなこの猫

授業参観か…僕も好きな行事では無い。全集中で取り掛からなければならない行事だからだ。因みに親が来ていると緊張で集中出来ないとかでは無い。いつも通りに授業を済ませれば良いだけだからな。問題は僕の両親についてだ。特に母さんだな…

（ねぇー？あの子さぁ）（お母さんも大変ねぇ～）

チッ…思い出すだけでも吐き気がする

[お、おにいさんどうかした?身の程知らずの上っ面ＤＱＮ男に口説かれた時のさとり様そっくりの顔してるけど]

どんな顔だ。

まぁ、僕も注意しなければな。父さんは仕事で来れるか怪しいが、母さんは確実に来るだろう。古明地はどうなるのか気になるが…

さて、コーヒーゼリーも食した事だし、今度こそ帰るとしよう…

[おや?帰るのかい?せっかく会ったってのにまだあたい質問してないよ]

お燐はそう言って僕の足元に擦り寄ってくる

やれやれ、こっちはあまり古明地とその関係者とは関わりたくないんだがな。

しかし…ペットか

『一緒に暮らしている家族やペット達とは仲が良いですし』

古明地はああ言ってはいたが、僕と同じ心を読めるあいつがペットを飼ってるというのは意外に感じる。

試しに質問してみるか。

[なんだい?]

お前は古明地の事をどう思ってるんだ？普通は言葉の通じない存在が、自分の言葉どころか考え事さえもバレてしまう、そんな性質を持つ主人をどう思ってる？

［さとり様？大好きだよ！あたいだけに限らず、他のみんなもさとり様のことが大好きさ！まぁ隠し事とか出来ないけど］

…本心か。というより、他の皆という事はコイツ以外にもいるのか

僕は動物の心を読む事が出来る。上手くいけばペットと心を通じ合い、最高のパートナーになれるかもしれない。

だのに何故、僕は動物を飼っていないのか

因みに、母さんが猫アレルギーである事は関係ない。これは猫限定に限るもので、動物を飼わない理由とは言えない

僕が動物を飼わない理由は、実に単純だ

僕からすれば動物は人間とほぼ同じなのだ。正確に言うと、性格がな。ダジャレじゃ無いぞ

動物の心が分かるのなら、その動物の性格までわかるのだ。実際の性格が、皆が動物に抱いているそれぞれのイメージと近いのもいればあまりにもかけ離れている動物だっている。つまり千差万別。ほぼ人間と変わらない

見知らぬ『人間』を『飼う』という考えが浮かばないのだ（因みにワープは含まない。

あれは生き物ではなくロボットだ）

だから僕は同じ…いや、僕よりも強いテレパシーを持っている古明地が、ペットを飼うという事に意外性を感じているんだ。だがこれで分かった。古明地にとって動物を飼うというのは、家族と暮らしている感覚に近い。

動物を『人間』として見てる故に飼わない僕と、動物を『家族』として見て一緒に『暮らす』古明地。

…やはり僕に似てるようで全く違う存在。やれやれ、やはり下手に一括りできないものだな。超能力者とは…

［もう、さっきからおにいさんが質問してばっかりじゃないかぁ。あたいにも何か質問させておくれよ］

残念ながらそんな時間は無さそうだぞ

［え？］

お前を探しているらしい猫がこっちに来ている

［見つけた!!火焔猫先輩!!火焔猫燐先輩大変です!!］

凄い名前だな。海藤がくい付きそうな字面だ

［あんたさぁフルネームはやめろっていつも言ってるでしょうが!!あたいは本名長いから嫌いなんだよ！］

［そんな事より緊急事態なんですよ！今日さとり様が行く予定だった買い出しについてなんですが…］

よし、帰るとするか。流石にこの慌てようを無視して僕に話しかけようとはしないだろう。というか、この猫も古明地のペットか…何匹飼ってるんだ？

僕は火焔猫から目を離して公園を出た。

知らせで衝撃を受けた火焔猫の叫び声が聞こえたのと同時に

［お空さんが、落ち込んでるさとり様の役に立ちたいと言い残して、商店街エリアに出かけてしまいましたぁ!!］

「…なんですとおぉーーー!!!??」

この時僕は気付かなかったが、この叫びは間違いなく火焔猫のものだったが、出て来たのは間違いなく人間の言葉だった

第１６Ｘ　大Ψ害!!フューシ?ョンを止めろ！

（ＰＭ　１：３０）

”絶対は絶対にない”

…これは…まさか…

超能力が…!?超能力が使えなくなった!?

”どんなに確定的に思える事象でもその時にならない限り分からないものである”

僕は家に帰る途中、妙な感覚を覚えた。一瞬の頭痛を感じた途端、変化は起こった。何故今いきなりなのかは分からないが、僕は解放されたんだ！超能力という呪いから！

”あり得ないことはあり得ない”

他人の声が聞こえない！今僕は人通りが少ない住宅街を歩いているが、いつもは周りの心の声を拾って、常に商店街にいるほどの声が流れ込んでくるのに。

”どんなに非現実的に思える事象でも起こらない保証など存在しないものである”

行き先を思い浮かべて、そして…

ふん…！…瞬間移動も出来ないぞ！

”非現実的な事は何の前触れもなく起こり”

そして極めつけは…暑い！
パイロキネシスが作動しないから、体温調整が出来ない！これが暑さ…！これが汗…！
”確定的だった事は何の前触れもなく外れ”
今まで、勝手に体温調整されるものだから、暑さも寒さも感じない身体だったというのに…！
凄いぞ…！このモアッとした熱気…どんどん汗が出て来る！体が赤く燃え上がる様だ！この空のように!!
…え？
”それらはいつもの日常に突然訪れる”
僕は明らかな異常を感じ、ふと空を見上げた。
”このように、神が降臨する事はあり得ない…事はあり得ない”
文字通り目を焼きそうな異常な明るさ…体感的に４０℃は超える気温…逃げ惑う人々の叫び声…あまりの熱さに叫ぶ人々…商店街のある方角から発せられる光…
”このように、街が平和なのは絶対…は絶対にない”
数秒後…謎の人工太陽爆発
”それらはいつもの日常に突然訪れる”

Ｓ県左脇腹町商店街エリア

…壊滅

（ＰＭ　０：４５）

〈予知、予知夢〉

自分の意志では発動できず、突発的に頭痛と共に起きる。その上、予知する出来事は情景を一瞬写す程度の情報しかないことが多く、いつ起きることなのかも分からない。

夢を見ている時に頭痛と共に発動した場合、その夢を１００％現実にしてしまう恐ろしさがあるが、その後の行動次第で回避可能

だが斉木が常に夢見ている願望『超能力の使えない自分になる』だけは叶えられない。

これもどうせコピペだろ。

だがそんな事よりこの頭の痛さ…今のは予知、いや予知夢だ。僕が頭痛を起こした時

に映る光景は１００％現実になる。夢の中で聞こえた謎のナレーションと矛盾しているが、僕が動かない限り予知夢は絶対だ。

だが今回の予知夢は謎が多い。今思い返すと謎が二つ現れた。

一つは割と簡単に解決した。何故住宅街を歩いているのに夢を見たのか。

原因は恐らく、白昼夢だ。

僕が常に夢見続けている『超能力が使えなくなる』という願望が、とうとう僕に白昼夢を起こさせるほどになったのだろう。

やれやれ…まさか白昼夢でも予知夢を見る事になるとは、白昼夢はいわば空想の自由空間だというのに、本当に駄目な能力だ。

そしてもう一つの謎。爆発の原因。

これは本当に分からない。大体何故商店街の上空に小型の太陽が現れる?これまでに非現実的な事は何度かあったが、そういった事は悉くスルーされてきたのもあり原因は解明されていなかった。

だが、僕の未来で予知したものは必ず現実になる。原因はわからなくとも結果は決まっているのだ。

本物の太陽の高さからして、時間はおよそ午後１時半。その頃に商店街は謎の爆発によって消滅する

まぁ結果以外がノーヒントな以上、対策は立てられない。まずは商店街に行くとするか…

――

［お空さんが、落ち込んでるさとり様の役に立ちたいと言い残して、商店街エリアに出かけてしまいましたぁ!!］

「どういう事だい!?お菓子でも卵でも浪費して良いから、間違っても外には出すなって散々言ったじゃないか!!」

ペットの一人の猫又から緊急事態を知らされたあたいは、パニックに陥っていた。それは、咄嗟に猫形態から人型形態に戻ってしまうくらいには。周りに人間とかいなくてホント良かったよ。いつの間にかおにいさんも居なくなってるし…

なんてこった…まさかお空が単独で外に出かけてしまうだなんて…

霊烏路空、通称お空。

あたいの親友で、さとり様のペットの一匹で、種族は地獄鴉。そしてあたいと同じく人型を有してる。

見た目は大人なんだけど、全体的に子供なんだよねぇ…

〈地獄鴉〉

地獄の闇から生まれ、地獄の亡者の肉を啄む鴉の姿の妖怪。灼熱地獄にも耐えられる

高温耐性を持ち、火球状の弾幕を放つ

…これ以上の情報が無いのは何故だろう。

とにかく、お空が一人で外に出るのはマズイ!あの子、真面目で素直だけど、他人の言う事も簡単に信じちゃうから悪い人間たちに騙されちゃう可能性もある!

それに不慣れなこの世界の外で暴れたりしたら更に最悪だよ!いくら能力を取り上げられてると言っても地獄鴉としての力は普通にあるんだし!もし弾幕とかぶっ放しちゃったら!でも無理に止めても…ああ面倒臭い!!

「しょうがない、早く追うよ!さとり様はなんて言ってる?」

形態を猫に変えながら主人からの指令を仰ごうとするが、猫又は微妙な顔をして…

[それが…お空さんの事を知らせた途端にさとり様も探しに行こうと飛び出したんですが…呻きながら『リングを付け忘れてた』と呟いて…現在寝込んでます…]

(さとり様ぁ!?)

主人を悪く言う気はないが、『うちの主人はアホですか!』と叫びたくなるのをぐっと堪えながら事態悪化に頭を痛める。まぁ昨日の夜から落ち込んでたから無理もないかも知れないけど…

[とりあえずさとり様はアンタ達に任せるよ!あたいはお空を追う!商店街エリアだね!]

確認をとってあたいは全速力で商店街エリアに向かう。さとり様が寺子屋に行ってる間にこの町を探索してて良かった。

あたいは脳内の地図を参考に商店街エリアに向かった。あそこは人間が多過ぎるし『野良猫』を嫌うのも多いから途中から人型にならないといけないのが玉に瑕だけど、お空の為には仕方がない…!

そう言えば能力は取り上げたけど信号弾は持ってたよね確か…

ーー

（ＰＭ　１：２８）

さて、商店街が爆発が起こるまで残り二分。三十分前から様子を見に来たが、未だ特に変わった所はないな。強いていうならあらゆる所で油揚げフェアをやっているくらいだ。油揚げシュークリームってなんだ？気になるぞ

しかし今は食べている場合では無い。この商店街の人間達の運命が掛かっているんだ。あの太陽が現れる直前に阻止しなければならない。もう事前に阻止するのは諦めた方がいいだろう

「いらっしゃいませー」

太陽が現れた原因の予想は僕の中では大きく分けて二つだ。一つは、天変地異。これは真っ先に思い浮かんだが、今となってはその可能性が薄くなりつつある。

あの火山の大噴火のように自然災害は何かしらの凶兆があり、僕は普通の人間では気付かないような僅かな凶兆も逃さず察知できる。しかしここまで時間が迫っているというのに何も感じないのはおかしいのだ。自然災害の可能性はほぼ皆無と言って良い。恐らくこの予知で起こる出来事は災害では無く人災だ。となると原因はもう一つの予想。それは…

超能力者の仕業だ。

しかし、そっちも可能性は高いとは言えない。なんてったって規格外すぎる。太陽を創り出すだなんて、そんな馬鹿げた力がこの世に存在するのか?しかも予知の内容からして突如として現れた感じだった。

咄嗟に太陽を創り出す力…そんな馬鹿げた能力など…ないとは言い切れないな。むしろ有ってもおかしくない。僕の存在がそれを証明している。僕も太陽は無理でも巨大な火球を作る事は出来る。

マズイな…一気に可能性が高まった。それにしても最近は超能力者によく遭遇するな…古明地と遭遇してからまだ数日しか経ってないぞ。

しかし、もし超能力者ならばあの火山再発に関わりが…

「ありがとうございましたー」

（ＰＭ　１：２９）

残り一分を切ったか…そろそろだな

油揚げシュークリームを食しながら、足がつまづいたのか僕の隣で転ぶ所だった女の子？と持ってた油揚げフルーツサンドを片手間キネシスで救出し、事態に備える。無事防げたらそれも食すとしよう

僕の一番の優先順位は現れる太陽を直ぐに消滅させる事だが、可能であれば能力者を捕縛する。

残り十秒。さあ…

来るなら来い…太陽!!

第１７Ｘ　厄Ψアニマルス?、Ψ初の出会い

「おっと、お燐ちゃん!今日は活きの良い生鮭が入ってるよ!…え?背が高くて頭に大きな緑のリボンを付けた黒髪の女の子?見たっけかなぁ…」
「あらお燐ちゃん。先日はうちの猫ちゃんを見てくれてありがとうねぇ。ん?大きな白いマントをかけてる大きな女の子?そういえば見た気がするねぇ…」
「あ、猫耳のお姉ちゃん!え?おっきな翼を付けたでっかいお姉ちゃん?うーん…見たような気がする。でもお菓子に夢中になっちゃって、あまり覚えてないや」
(なんでだよ!大きなリボンと大きなマントはまだ良いとして、背中にでっかい翼が生えてたら嫌でも目立つだろう!?)
　商店街に着いたあたいは人目のつかない場所で人型へと戻り、お空を探していた。最初は、
「お空の格好で街に入ったら嫌でも目立つだろうし、早く発見出来るかも」
　と思ってたけど、買い出しで知り合った人間達に聞いてみた所、出て来た返答が「見た気がするけど覚えてない」というまさかの返答…。
　あたいがこの世界に放り出されてすぐ救出された時に、あの隙間賢者が言ってた事が

蘇る。

――

「この世界は…なんと言うか、『特徴的な格好』に対する境界が緩いのよ。だから貴女達の格好で外に出ても『そういうファッション』の扱いになるの。さとりんや妹ちゃんのサードアイとか、貴女達の尻尾とか羽とか…。変身するのを見られなければ大丈夫な筈よ」

――

人間の邪魔にならないように路地に入り込んだあたいは尻尾をだらりと垂らしながらため息を吐く。

半信半疑…いや、一信⑨疑だったけどマジだったのかい…

でもこの格好（人型だがリアルな猫耳と2本の尻尾付き）でジロジロ見られたりしてない時点でそういうことなんだろうし、何度か商店街には行ってるけどみんな割と親切。

なんだかんだで賑やかだし、あたいはこの商店街を気に入っている。例えるなら喧嘩と無法と混沌を抜いた旧都…いやそれ抜いたら逆に何が残ってるの？とか言いたくなるけど気にしてはいけない。

しかし、かえって見つかり難いという事態になるとは思わなかったね。それでも聞き

込みしか方法は無い訳だけど…

よし、商店街が無事な内にお空を見つけないとね。

「それにしても今日は屋台が多いね…ここまで多いとお空もおつかいを忘れて屋台巡りしてそうだし、温泉卵の屋台でもあったら間違いないんだけど…流石にないか」

それにしても油揚げフェアって、隙間妖怪の式神さんが喜びそうなイベントだ。別にこの町は油揚げが盛んだという訳ではないのに

卵以外でお空が好物なのは…たしか前さとり様が買ってきてくれたお土産のカスタードシューを凄く喜んでたっけ?それっぽいスイーツの屋台でも…

「お?なんだこりゃ?リアルだな」

ニギッ！（ピン!!）

「……!!」

やらかした後で思ったんだけど、そいつは飾りの付け尻尾だと思ったんだろうねぇ。猫型だったらやらなかっただろうし。でもしょうがないじゃん?尻尾引っ張られたら痛いんだもん…

あたいは勢いのまま、尻尾を引っ張った大柄なケツアゴの妖怪?が立っている方を向き、サマーソルトキックを放った。

「どぉらあ!!」

「あぐおお!!」
　自分でもビックリなダミ声で叫びながら放った回転蹴り上げは、ケツアゴにクリーンヒット。幸運だったのは、入り口とはいえ路地だったこともありあたいの蹴り上げを見てる人間はいなかった事と
「痛えな何しやがんだ！思いっきり舌噛んじまったじゃねえか!!」
「こっちの台詞だよ！よくもあたいの尻尾思いっきり引っ張ってくれたね!!猫の扱いってのを叩き込んでやるよ!!」
「おおやんのかこら!!」
　この世界にいると、生物の体質が異常になる事だね

ーー

「うえええ…気持ち悪い…」
　最悪だ…まさか安全装置（ＧＥリング）を付け忘れるだなんて。
　家を飛び出して直ぐにぶっ倒れてペット達が必死になって玄関まで運んでくれたのは本当に嬉しかった。
　でも何故かキボウノハナな倒れ方してたという事実に羞恥心でも死になるうえ、うちのペット数匹もノリでやったのか『何やってんだ…ですかだん…さとり様ー!!』って聞

こえる始末。まぁ本当に何やってんだろうね私…

ただでさえ精神的に参って憂鬱なのに、今度は身体的にも参る羽目になるとかついてない…いや、この世界に連れてこられた時点でついてなかったわ。

「でも何かしら…お空だけじゃなくてお燐にも大変な事が起きている気がする…」

やっぱり行くしかないのだろうか…いやでも安全装置を付けたとしても多少の負荷は掛かってしまう。こんな状態で外に出てもまたキボウノハナになってしまう…

私の体調かお空とお燐かを秤にかければ…簡単に決まった。お空とお燐が優先。

『駄目だよさとり様！まだ寝ないと！』

『きっとお燐さんが見つけてくれるよ！』

健気に私を心配してくれるペット達に揺らいでしまうが、心体に鞭打つように起き上がって安全装置の着用を…

「全く、そんなんだから体を壊すのですよ。気持ちは分かりますが、ペットに余計な心配を掛けさせる飼い主は落第点ですよ」

あ、貴女は…

という訳で、私はベッドで横になりながら借り受けた映像投影機能付き陰陽玉でお燐

の様子を見ていました。因みにこれはお燐とお空がやっちゃった異変（東方地霊殿より）で使われたのを改良したものだそうです。

元は何かのゲーム機のコントローラーで操作して商店街を見回ります。この画面でも私の能力は健在ですが、結界で守られてるのもあり聞こえるのは今映っている生物のみであるという優れもの。しかし向こうはどうなっているのでしょう？一応ぶつからないようにしてはいますが、いま映っている地点の周囲の人間達は気付いてないようですね…ステルス効果でもあるんでしょうか？

そうして操作に慣れながらお燐とお空を探していると…

見つけた！お燐！それと…こいつは！

（フシャーー!!）（おいい～…）

確か同じクラスにいた燃堂とかいう不良の見た目をした何も考えてない人間。というかお燐めっちゃ逆立ってる!?

なんてこと…絡まれてるのがお空じゃないだけ良かったと思うべきか、お燐までトラブルに巻き込まれるなんて不幸だと思うべきか…

どうする？お燐の事だから即攻撃に走ったりはしないだろうけど、人間の方が何をするのか分からない。自衛の為とはいえうっかり殺っちゃったら洒落にならんしお燐にテレパシーでも送って救出させるべきか—

「ぷっ…ははははっ！中々話の分かるねーちゃんじゃねえか！」
「アンタも猫というのをよく分かってんじゃん！見直したよ！」
　なんで打ち解けてんの？
「いやぁ悪かったなぁいきなり尻尾掴んじまってよぉ。大丈夫かぁ？」
「大丈夫大丈夫、これ付け物だから（何で本当に大丈夫何だろ？）」
　猫に何てことしてんだあの人間！尻尾引っ張られて大丈夫な訳…本当に大丈夫そう？
「あたいこそ悪かったねぇ。驚いた拍子とはいえ顎蹴り上げちゃって。舌とか大丈夫かい？」
「おう、痛かったけどよもう治ったぜ」
　お燐もお燐で結構な報復をしてたんだ…
　大騒ぎにならなくて良かったとはいえ面倒なのは変わりませんね…
「オウ…ねーちゃん友達とはぐれちまったんかそりゃやべぇな。」
「まぁね…それにあの娘商店街に来るの初めてだからさ、絶対迷ってると思うんだよ…心細くて泣いてないか心配だなぁ」
「だったら俺っちも探すの手伝ってやんよ。どんな奴なんだ？」
「良いのかい？特徴はまぁ分かりやすいよ」

役に立つかは怪しいですが、一応お燐は大丈夫そうですね。さて、問題のお空を探さないと…

そう思って操作しながら探していると、お燐がいる地点から１００メートル先に

お空いた！…と、誰かと一緒？

…え？

ーー

（ＰＭ１：３６）

ふむ、サクサクとした油揚げとバターの風味が別格だ。中々悪く無いぞ油揚げラスク。シュークリームやミルフィーユも美味だったが、シンプルなラスクの方が味もシンプルで好みだ。

さて、今僕は空いているベンチに座って油揚げスイーツを食しているが、実際の所のんびりしている場合では無い。

前Ｘ僕は、今日の午後一時半に突如太陽並の火球が出現。それの爆発によって商店街が壊滅…という夢を見た。僕の夢は全て予知夢、それは白昼夢でも変わらないし、放っておけば現実になる。

原因が全く不明な為、後手に回るしかない。偽太陽が現れた瞬間に対処する。多少の混乱は起こるだろうが、それよりも予知を阻止する事が重要だ。時刻午後一時二十九

分、覚悟を決めた僕は太陽を何とかする為に構える。場合によっては制御装置を外す事も視野に入れて

そして一時半、予知の通り太陽が…

現れなかった…因みに三分間構えていたが何も起こらなかった

僕の予知が外れる事はない。これはつまり、僕が介入した事で未来が変わったという事だ…しかし、どのタイミングで変わった?ただ僕が商店街に来たからという訳ではないだろう。

そんな感じで構えるのをやめてスイーツを食しながら二分くらい考え込んでいたんだが、ちょっと面倒な事が起こった。

「お兄さんお兄さん!このお菓子美味しいね!!」

何なんだこの女?僕の隣に座ってスイーツを食してる長い黒髪の女に何故か付き纏われている。

約六分程前…予知の時間になる五秒前に、油揚げシュークリームを手に持っていたコイツが僕の後ろで転びかけたのをサイコキネシスで浮かせて助けた。

気付かないように一瞬だけに留めたつもりだったが、何故か僕が助けてくれたと思われたらしい

大きな緑のリボンや白いマント、なんかデカイ真っ黒な翼が付いてるが、気にしない事にしよう。ツッコんだら負けな気がする。

それにしても身長高いな。窪谷須よりちょっと低いくらいだぞ

因みに頭の中はスイーツで埋まっている。

とにかく僕は本当にもうここで爆発が起こらないかを確かめなければならない。ひとまず商店街を周ってみるとしよう

「あれ？お兄さんどこ行くの？」

（五分経過）

付いてくる…特に何をしてくる訳ではないがずっと僕の後ろに付いてくる。

「そっちに美味しいお菓子があるの？」

やれやれ、僕は早く爆発の原因を見つけなければならないというのに。瞬間移動で逃げる事もできるが、こんな人通りの多い場所でやったら面倒だし、今商店街を離れる訳には行かない。燃堂みたいに邪魔をする訳では無さそうだからそこまで気にする必要は無いか

（どん）

イタッ…何にぶつかって

「…お?」
「…?どうしたんだい?」
「今誰かにぶつかってよお?相棒だったような気がしたぜ」
「相棒?」

〈どっかのビルの屋上〉

咄嗟に瞬間移動してしまった。でもまぁ危なかった。まさか燃堂と鉢合わせるとは…周りには見えてないようだが、あの女からは不審がられただろう。まああれは後で対処すれば良い。

燃堂と鉢合わせるのは面倒だし、少々疲れるがここから千里眼とテレパシーを駆使して…

「え?ここ何処?」
…え
「なんで!?さっきまで人混みを歩いてたのに!」
こ、コイツ何でついてきて…はっ!上着の裾!僕の服の裾を掴んでいた事で瞬間移動に巻き込まれて…!
「お兄さん…」

…落ち着け。慌てる事態では無い。寧ろ巻き込まれたのがコイツだけで良かった。
「もしかして、さとり様のお兄さん!?」
…は?
「髪の色が似てるからもしかしてって思ってたけど、凄いや!お空感動したよ!」

…やれやれ、変に警戒されてしまうかと思っていたが杞憂だったようだ。
この女が古明地の関係者である事は分かっていた。1日に二人も出会うとは思わなかったが。常に何も考えていない燃堂とは違い、普通にテレパシーを出す。そしてこの女は心の中でこう言った。
(さとり様と同じ髪の色…)
だから僕に付いてきている段階で、既に解っていたのだ。だから爆発の一件が終わってから対処しようと思っていたが、余計な手間が省けたな。ただ
「私は霊烏路空!みんなからはお空って呼ばれてるよ!よろしく!さとり様のお兄さん」
余計な誤解が生まれた。

――

〈古明地家〉

「もう…しーらない…」
余計な事案が増えた。

第18X　Ψ悪の鳥　霊烏路空

どっかのビルの屋上。思いがけない偶然によって、目の前にいる謎の女…霊烏路空に僕の正体がバレてしまった。

そんな僕が最初に行ったのは…

（瞬間移動）バッ…！バッ…！

（そして早着替え）

「うわぁー!!凄い凄ーい!!一瞬で着替えた!!」

僕の能力を彼女に披露することだ

抵抗が無いかと言われれば嘘になるが、誤魔化した所で意味がない。この女が古明地の関係者である以上、間違いなく古明地は僕の事を話す。変に歪んだ状態で伝わるくらいなら正直に話した方が良い。

「ねーねー次は!?」

というより、古明地はこいつに僕の事を話してなかったのか？あのお燐とかいう猫には話していたようだが…

そんな疑問を抱いていた僕だったが、サイコウェーブを披露した辺りから別の疑問が生じた。

…何だコイツ？

「凄い凄い!!次は何を見せてくれるの!?」

何だその反応は…僕が見せているのは手品じゃなくて超能力だぞ？今まで他人に超能力を披露した場合、普通は⑨割の驚愕と1割の恐怖だ。驚愕しながらも直ぐに受け入れてくれた僕の祖父母でさえも、1％くらいは恐怖に近いものがあった。しかしそれは当然の反応であり、誰だって未知が目の前にあれば恐怖くらいは多少抱く。因みに僕の両親はノーカンだ。そして兄貴も。アレは嫉妬、劣等感、嫌悪感が三割ずつで残り一割は快楽（ドＭ特有で質の悪いやつ）だ。

しかしこの女の場合は、十割の賞賛だ。いや、何度か子供などに披露する事も偶にあった（故意ではなく事故のようなもの）。その場合は恐怖は無くとも驚愕と賞賛が半々だ。いくら目の前の女が見た目よりも幼い性格だったとしても全く恐怖せず驚かず賞賛のみを送られるのは、僕からしたら違和感を抱くのに充分だ。

この場合は大抵…

「どうしたのお兄さん？難しい顔して…」

一応僕が古明地の兄だという誤解は解けたが、何故か僕をお兄さんと呼ぶ。余計な誤

解を生みそうだからやめて欲しいがそんな事より

お前、なんか妙に見慣れてないか？

「見慣れてる？何が？それと、私はお空だよ！」

無自覚か、それともコイツ自身も能力者なのか…もし古明地が住んでいた場所が、能力者が普通にいる『ＹＯＵＲＳＨＯＣＫ!!』な場所だとは思いたく無いが…まぁこの町に言える事じゃ無いか

あの猫に見せればまだまともな反応になるのだろうか。だが古明地から超能力者だと聞いている以上微妙な所だが…ん？お空？そういえば僕があの猫から離れた時…

ーー

［お空さんが、落ち込んでるさとり様の役に立ちたいと言い残して、商店街エリアに出かけてしまいましたぁ!!」

「…なんですとおぉーーー??!!!」

ーー

こいつがお空か

よく考えてみたら古明地の関係者がなんで商店街に出歩いてるんだって話になる。

やれやれ、別に助ける義理なんてないが、気付いてしまった以上仕方がない。丁度あの猫…火焔猫も商店街に来ているだろうし、古明地に貸しをつくるのも良い手だろう

「お兄さん？」
（斉木説明中）
「お燐が来てるの？…でも買い物が」
多分それはもういいと思うが。大体何を買うのか聞いたのか？飛び出して行ったと聞いたが
「…何だっけ？」
君は馬鹿か？何も聞かずに飛び出したのか。それに多分お金も足りないだろう。さっきスイーツを食してたからな
やれやれ、火焔猫が慌てていたのがよく分かったな。こいつの精神構造は子供寄りだ。燃堂よりはマシではあるが限りなく近い存在
面倒になる前に突っ返すか。火焔猫とは一度会っているから見つかる筈だ…千里眼！
（三分後）
僕は疑問と焦りを感じていた。後ろでお空が寄り目をしようとして涙目になっている事に気付かないほどに
いない…どこを探してもいない…どういう事だ？僕の千里眼は、一度見たものでないと見る事が出来ないが、逆にいうと既に見たものは必ず見れるのだ。だがダメだ。いく

ら探しても火焔猫が見つからない…それだけでなく発動した時点でおかしかった。いきなり燃堂の顔面がドアップで現れたのは中々くるものがあったぞ。

やれやれ…全てでは無いと思うが、古明地が来てからというもの意味不明な事が起こり過ぎだ。

面倒だが自力で探すしか無いな。事故とはいえ巻き込んでしまった以上、コイツを見殺しにするのも夢見が悪いし、古明地が絡んでいる以上目を離すわけにもいかない。

僕は決心して猫探しを始める為に立ち上がった

「お兄さんどうしたの?」

ついてこいお空。

――

やれやれ、超能力に頼らない人探しも疲れるな…人が多いからテレパシーは機能しないし、千里眼も使用不可能とあれば、地道に歩いて探すしか無い。それどころか僕の後ろには大きな子供が、この商店街の何処かにはミステリアスバカも徘徊している可能性がある。そのうえ猫を探している訳だから下を向いて探さなきゃいけない。やれやれ、踏んだり蹴ったりだな

「お兄さん何処に行ってるの?」

お前も探せ。保護者を探してるんだよ。しかし猫が保護者というのはなんとも意味

不明というか悲しくなるというか…
「うん分かった！お燐何処かなぁ…」
良い返事。だが下を見ろ下を。探すのは猫だから周りの人を見たって意味無いだろ。
やれやれ、このままでは一向に進展が無い。こうなったらアレをやってみるとしよう。
『ダウジング』
僕は右手を前に出して意識を掌に集中させると、僕が今探しているものがある方角を当てる事が出来る。相トのような人探しの能力よりはかなり劣るが、千里眼が使えない状態…つまりは手がかりが無いものを見つける為にはこれを使う他ない
ただしこの能力は未だに試験運用中だ。母が偶に何かを無くした時に何度か試しているが、成功数は計十回やって七回くらいという所だ。まだまだ改良の余地がある。
動物に向けてやるのは初めてだが、やらないよりは良いだろう。試験運用の良い機会だ
早速腕を前に出して意識を集中さ、少しずつ体の向きを変えて探し出す
十数秒後…
お空が僕の周りをキョロキョロし始めた頃…来た!!僕の中にある脳内ペンデュラムが揺れた。ここから東の方角か

「おわわっ!?お兄さん!?」

僕はお空の手を引いて東に進む

周りの人にぶつからない様に火焔猫を探す。裏路地などにも目を向けるが見つからない。もっと先にいるのか?それとも裏路地を移動でもしたか?

足を止めてもう一度ダウジングを繰り返してあの猫のいる方角を__

(どん)

イタッ…アレ?デジャヴ?

「…お?」ケツアゴの妖怪出現!

瞬間移動!!

「あれ?おr__」

「ん?」

__

「今お空がいたような気がするんだけど…」

妖怪みたいなケツアゴのお兄さんと出会って捜索を再開したアタイは、一瞬聞こえたお空の声に反応したが向いた先には普通の人間しかいなかった。

空耳だったのか…いや、猫の聴覚は人間の8倍で犬の2倍と言われている。それにアタイは火車だから他の猫よりも良い筈(※そんな記述は無い)

それにさっきの足音もお空のだった。一緒についさっき聞いたことある足音も聞こえた気がしたけど…

アタイが考え込んでいるとお兄さんが別の感想を言う

「お?そうなのか?俺は相棒がいた気がしたぜ」

「さっきから言ってるけど、相棒って誰なんだい?」

「お?知りたいんか?相棒はよ、とにかくスゲー奴なんだぜ」

「へぇちょっと興味があるね。どんな所が凄いんだい?」

この世界の人間達は猫の気持ちを分からない輩ばかり。でもさっき出会った超能力のお兄さんだったり、話してみたら猫の事をよく分かるこのケツアゴのお兄さんだったりと、アタイが興味を引く人間もいる。そんなお兄さんが認める凄い相棒…一体どんな所が

「スゲー良い奴」

「そんだけかい!!」

「お?それ以外にスゲー理由があんのか?」

「哲学!?アンタの中での『良い奴』ってなんなのさ!?」

「良い奴は良い奴だろ?」

ただ純粋に良い奴なだけで相棒と呼ばれている人間には割と興味はあるけど、意味不

明過ぎてアタイは考えるのをやめた。
お空の捜索を続けよう
（信号弾を上げてくれたら分かるんだけどなぁ…）
――
危なかった…やれやれ、千里眼が不調の次はダウジングの不調か…元々試験運用中の能力だから期待はしてなかったが、まさか連続で燃堂のいる場所に辿り着くとはどうなってるんだ？
瞬間移動する直前周囲にいないか確かめたが猫は見つからなかった。そもそも裏路地のない大通りに猫がいる訳が無いか。もしかして、燃堂が飼っているハムスターのように服の下に潜んでいたりとか…
「あれ!?また違う所!?さっきお燐がいた気がしたのに…」
すまんなお空。出来るだけあのケツアゴのダンディーとは関わりたくないんだ…は？いたのか？火焔猫がいたのか!?
「うん！いたよ！あの顎の凄い人と一緒に！」
嘘だろ？人違い…いや猫違いかと思うが、あんな特徴の凄い猫を見間違える事は無いだろう。しかし、さっきは何度周りを見ても火焔猫どころか猫一匹いなかった…まさか肩乗り猫？燃堂の肩とかに乗っていたのか？

（うーんどうしよう…どうやったらお燐に気付いて…うにゅ？）

いや、そんな状況は割と目立つだろ。多分違う。まさか、千里眼やダウジング以前に僕の目が不調を起こしているのか？いや、もしかしたら死角になっていて見えなかった可能性も…だが最近は遅くまで本を読んだりしていたから多少の不調は起こっているのは確かだろう。目は疲れて頭が痛い…ん!?痛っ

――

「さーん、にー、いーち…」

『カッ』

腕に棒のようなものを装着した誰かのカウントダウンと同時に、上に向けている棒の先端が真っ白に光る。そして周囲は真っ白な光に包まれて…

――

なんだ今のは？

意味不明な予知だが、少し前のあの予知が思い浮かぶ

そういえば爆発の一件があるんだった。特に何もなかったし、猫探しに夢中だったから失念していた。

前途多難もいいところだぞ、やれやれ…

「お兄さん！お空いい事考えた!!」

すまんが猫探しは後回しだ。今はそれどころじゃない。商店街消滅の危機なんだ。いや、今回は結果が出ていないからどうなるかは分からないが、きっと碌でもない事になるに決まっている

（ゴソゴソ…）

「あった！これだ！」

しかし、結果は見えなかったが犯人の姿はうっすら視認できた。後は特徴と該当する人物を見つけて消せば…

特徴は僕より高い身長、長い髪、大きいリボンを頭に付けている

「確かここを押して…」

（ガキンッ!!ガキンッ!!）

なんだこの音？何をやっている？まぁいいか。そして極め付けに、腕に柱のような六角形の棒を付けている。そう、〝今お空が腕に取り付けたような物〟

…は？

「凄い凄い!!あんなに短かったのにあっという間に長くなった!!」

お前かよ!!

「さとり様が教えてくれたんだ！コレをおそらにドカーンでお燐が気付くって!!」

いかにも世界を炎の海に包み込むようなそのバズーカ砲はなんだ!?というかソレ何

処に隠し持ってた!?伸縮式!?
「バズーカじゃないよ！制御棒だよ！」
制御棒？核!?まさかあの太陽もこいつだったのか？アレは太陽のような火球じゃなく太陽そのものだった…つまりコイツの能力は核。しかも核は核でも『核融合』!?
〈核融合〉
水爆などで利用されている技術。制御が難しく、核融合炉の開発は困難を極めているまさに夢（幻想）の技術

そんな馬鹿げた能力を、こんな脳みそと精神が子供な奴が持って良い能力なのか？活用も悪用も出来ない、無益過ぎて誰にとっても破滅しかもたらさないぞ!!
「原子炉起動!!出力低下!!コレをしないと火の海なんだよ！怖いね！」
怖いのはお前だ！
ヤバイ！何が起こるかわかったもんじゃない！
「さんにーいち…」
カウントが早すぎるぞ!!
『爆符　ピコフレア』!!
まずい！間に合わない!!

『カッ!!』
（パン！）（ヒューー…）（バン!!）
花火…いや信号弾のようなものが打ち上げられ、空中で炸裂した。上空を一瞬真っ白に染め上げて
「うおっ！まぶし！」「なんの光ィ！」
当然そんなものを打ち上げると商店街の人達は反応する。そしてそれに大きく反応した者が一人…いや、一匹
「お？なんだ花火か？」
「アレは…お空の信号弾!!こっちか!!」
「お！待てよ猫のねーちゃん!!」

ホッ…ダメかと思ったが、思っていたより小さい爆発で良かった。眩し過ぎて目が少し痛いがな
「アレ？もうちょっと大きいの打ち上げたのになぁ？」
ふざけるなよ古明地。借り一つじゃ割に合わない。こんな危険生物を自由にするとかなんの冗談だ！というかなんだコイツは！今のより大きい爆発を起こそうとしてたのか!?

ついでにあの猫にも一言言ってやらないとな。恐らく今の信号弾で気付いただろう。現れたら速攻で捕まえて…

「お空！やっと見つけたー!!…あれ？おにいさんじゃないか。もしかしてお空を保護してくれてたのかい？」

…誰だコイツ？いきなり見知らぬ女が現れた。赤髪のゴスロリ衣装。そして目を引くのは頭にある猫耳と二本の尻尾。少なくとも僕の知り合いにこんな目立つ奴は…

「あ！お燐！」

お燐？何を言っている？僕が探しているのは猫だぞ

「聞いて聞いて！このお兄さん凄いよ！あっという間に着替えて！パッと違う所に移動したり！」

「落ち着きなよお空。帰ったら聞いてあげるからさ…いやぁ申し訳ないねぇ。大変だったろう？この子この通り子供っぽいからさぁ。おっと、そういえばこの姿は初めてだったね…よっと！」

（ポンッ!!）

間抜けな音と共にさっきまでの猫耳女はおらず、僕が探し続けた猫がいた。

お前…変身できるのか？

［ありゃ？思ったより驚かないね。まぁ超能力者のお兄さんならそこまで驚かないか］

僕も一応出来るからな。ここまで簡単じゃないが。まさか変化能力（トランスフォーメーション）使いとは思わなかったぞ。人と猫のどっちが本当の姿かは分からないが

［一応さっきの方が元の姿だよ。でもうーん、超能力とはちょっと違うんだけどね…］

いくら探してもこいつが見つからなかった理由が分かった。そりゃあ人型でいられたら猫型しか知らない僕に見つけられるわけない。

いやそんな事はどうでもいい！おい火焔猫！こんな歩く水爆生物を自由にさせてるとかどういう了見だ！お陰で商店街が消し飛ぶ所だったぞ!!

［ごめんごめん、帰ったらキツく言っておくから。あとアタイの事はお燐と呼んで…でも大丈夫だよ。今は力を取り上げてるからさ、さっきみたいな信号弾しか出せないし、ここら一帯を消滅なんて…ねぇお空？さっき打ち上げたの、おかしいと思わなかった？］

お燐が試しにお空に聞いてみると、やや不満気な顔で答えた。

「うん！出力を調節してたら、なんでか全く力が出なくて…本当はもっと大きくしたかったんだけどなぁ！１０号玉？くらいの大きさでどーん!!って」

おい街中で３２０ｍの花火を打ち上げるな！

しかし、だとしたらさっきのはともかく一つ前の予知はなんだ?どこで回避したかはもう分かってはいるが、あの信号弾以上の爆発を起こせないならあんな予知は見ないはず。やはり不調か?

［それじゃあアタイ達は帰るよ。後日お礼…というかお詫びするからさ］

コーヒーゼリー一個で許してくれると思うなよ、と古明地に伝えておけ

［分かってるよ、多分さとり様も申し訳なく思ってるだろうし。お空帰るよ～］

「うん!じゃあねお兄さん!」

ホッ…やれやれ、ようやく御守りから解放された。さてと、僕も今日は不調のようだし、帰って休息を…

「んたくよぉ、猫のねえちゃんどこ行っちまったんだぁ?おっ、相棒じゃねえかラーメン食いに行こうぜ」

…古明地の飼う動物は不幸を呼ぶのか?それとも古明地自身がそうなのか?

”因みにここまでしっかり覗き見ていた古明地は本日の出来事を本気で申し訳なく思い、左脇腹町のスーパーの全種類のコーヒーゼリーが買い占められるという事件が発生した。そして、大量のコーヒーゼリーを送られた斉木は、悪態を付きながらも全部許した”

――

そして古明地家へ

「全く、何を買えば良いのかわかんないのに飛び出すんじゃありません。心配したのよお空」

「うにゅ…ごめんなさいさとり様」

本心から反省して落ち込んでいるお空の頭を撫でながら、彼について考えていた

お空を見つけたのが斉木楠雄なのは不幸中の幸いだった。でも絶対嫌われたな…しかもあの燃堂とやらにエンカウントした時の彼の表情と心は絶望に満ちていた。私が本気で申し訳なく思う程に

本当にごめんなさい

「それとお空。その買い物袋は？やけに膨らんでるけど何買ったの？（多分お使いの為のお金だろうけど今回は大目に見よう）」

「これですか？さとり様へのお土産です！」

そう言ってお空が取り出したのは…映像で見かけた美味しそうな油揚げを使ったお菓子に…

何という事でしょう

しばらくは稲荷寿司に困らないくらいの油揚げが…なにこれ業務用？一袋４０枚？しかも１０袋？

「…お菓子は嬉しいわ。ありがとう…でもこの油揚げは…？いくら掛かったの？というかどうやって買ったの？」
「くじ引き？で当たりました!!」
なるほど、それはしょうがないかな…

しばらくは稲荷づくしが確定して頭が痛くなりかけたが、この先の問題（授業参観）よりは些事だと割り切って稲荷寿司の準備を始めた
割り切らんとやってらんねぇ…